

光盛舎さく丸の「どどいつ」本

菊池真一

光盛舎さく丸は、幕末に活躍した、都々逸・端唄・大津絵節等の作者である。都々逸連・端唄連を組織していたらしい。架蔵の都々逸本を中心に、さく丸の編著を紹介する。

さく丸の関係した都々逸本等には、次の十三種がある。

- 一、『都々一はうた節用集』甲本
- 二、『どどいつ葉唄節用集』乙本
- 三、『どどいつ葉唄節用集』丙本
- 四、『文句入都々逸』（仮題）
- 五、『都々逸種瓢箪』
- 六、『どどいつづけ 一へん』
- 七、『端唄のよせ本 月の巻』
- 八、『端うたと逸もんく入大一座』
- 九、『都々逸大一座』
- 十、『新撰大津絵ぶし』甲本
- 十一、『新撰大津絵ぶし』乙本
- 十二、『女大學絵抄』
- 十三、『一トつふ撰はうたの玉緒』

以下、詳細に記述する。

一、『都々一はうた節用集』甲本（別名：都々逸図会）

菊池所蔵本には題簽を欠くが、大阪大学忍頂寺文庫蔵本（G212）には、「都々一」はうた節用集の題簽がある。「一」内は角書。蓬左文庫蔵本（尾19-160）には、「都々逸図会〔初編より五編〕全」とあるが、手書き題簽である。「一」内は割書。万延元年（1860）序。

二編の自序等に「都々逸図会」とあることから、本書を「都々逸図会」とするのも間違いではない。

中味は三本ほとんど同じである。いずれも柱に「どど一初へん」「どど一二へん」「どど一三へん」「どど一四へん」「どど一五へん」とある。ただし、蓬左文庫本には途中一丁分破損がある（三編五丁目）。

初編四丁表に三遊亭円朝の都々逸が載っているのは特筆される。

以下、菊池蔵本によって翻刻する。△内は柱による仮表示。

△初へん▽

自序

四海波静けき御代の御恩徳。年々歳々日増に流布なす。都々逸節。二郎さん

松さんがらくたさんまで。朝寝の床もそれ成に。欠(あくび)しながら両房の。楊枝くわへて飛込一ト風呂。入るや入らぬに高声で。独りが唄へば此方でも。サツコラサノサエ引濁声をば振立て。又もやうなる其文に曰

万延と改る夏日 光盛舎さく丸誌(一オ)

(絵) 名月にふた筋三すじ柳かな(一ウ)

(絵)(二オ)

おまへみづしやうわたしはきしやうぬしにたゞよひなみのうへ(上広はる女)

やきもちらしいがいわねばならぬぬしはみつしやうきがおい(上広鎌太郎)(二ウ)

うめはきむすめさくらはごてんいきはしやくやくゆりのはな(上広みよ女)

ひとのあけんをなにきくものかおやにいわれたことさへ(行田ふさ女)

(三オ)

ぜひがなくなりやひとにもばかにされらたれゆへてめへゆへ(行田さは女)

すへのとけなくくろうはいやよしんほうするにもかひがない(三ウ)

おまへゆへならついつらいめも(はうた)(みやまのおくのわびずまるしばかるとわざいとぐるまほそだにがはのぬのさらし(いとやせぬぞへともかせ

ぎ(浅草円朝)(四オ)

つきはさゆれどわたしのむねがはれぬ思ひでくろうする(光盛舎さく丸)

思ふとうりにふうふになればおれいまいりにふたりづれ(上広さし菊つくる)(四ウ)

うちをせかれてわかれたあとでおもひだすたびあんじられ(上広さしきく)ほかにたよりがあることならばいまでかみにもたのみやせぬ(大茂いく

女)(五オ)

わたしばかりにくろうをさせて(清元梅川)それそのよふにいわんすければこのうめ川がみのつらさ(おまへのこころがしれかねる(下谷可山人)

(五ウ)

こひのむまみはまたべつなもののやぼにやいれまいこのあじを(三味せん堀下定)

ぎりもせけんもぬしゆへならばおやうけうだいむかふづら(上広なか女)(六オ)

うれしがらせてわかれたあとでまたもくろうをまさせるか(上広はる女)

しやかにやだいはよ菅家にやしへいぬしもまのさすものがある(全)(六ウ)

からかさのほねのかつほどかよはにやならぬ(こはいろ)(八ア、たれある

ふ清水寺の清玄ともあるふ身がこのすがたこれもたれゆへさくら姫ゆへさくらひめヤアイさくらひめヤアイ引(どうでやぶれたみじやものを(池の端錦

光)(七オ)

ふじとつくばはなににるものか思ひ思ひのやまのなり(下谷もといろ)

くろふ駿河の甲斐あるせいか富士にわいたるみのくわほう(下谷一庭)(七ウ)

いやなかぜにもなびかにやならぬつらひくがいのおみなへし(よし盛)

こはめしすてゝもやきばのかへりまつこうくさいであらわれる(升や勝

蔵)(八オ)

おやのめからはまだきむすめの(清元おそめ)(うちをしのでやうやうとこゝでたがひのやくそくとこゝるもほんにすみだがは(はなれぬおしのめうとづれ(尾花や露吉)(八ウ)

さみせんのどうなるものかこちやすてばちにこひに高ねのうはでうし(下谷の住人ムチャ)

うめの香はしはのよるほとあのすひさんめ驚さおひてもさゝこのみ(全)(九オ)

つらいわかれをこゝろでないてきづよくかへすもぬしのため(下谷きんし)

そつとかへしてためいきついておへやでしらぬけさのしゆび(全)(九ウ)
じせつきたつてさいたるはなの「二上りくづし」(うめにうぐひすなかのよ
さゑだぶりよいのにとまりきてなかせるしんせつをたつときやはなをちらし
ゆく)みをばもたせぬころかへ(下や木久清)(十オ)

(絵) さく丸撰
芳盛画

地本山「口」藤兵衛「十ウ」

△一へん▽

過(さき)の日。都々逸図会と題号し。顕わしたる作名人の小冊は。奇々
妙々と落が来て。実大都会の繁荣と。亦もやこゝに二偏を撰めよと。梓元
(はんもと)の進めによりヲツト承知と早呑込。すぐに通家(せけん)へ散
しを出し撰み出して書の如し

万延初の夏日 光盛舎さく丸誌「一オ」

(絵) 吉例

光盛舎の南窓に集人 都々逸図会を収らむ「一ウ」

(絵) しのふ川ほとりに鳴や行々子(一庭閑人)(二オ)

いちどあふたが思ひのたねよねてもわすれるひまがない(大和やいく女)

あれほどたしかなやくそくしたになにがふそくどうはきする(全)(二ウ)

あさがほのはなはうはきですへたのまれぬ思ひ思ひのいろにさく(上広鎌太

郎)

ひと日はあはねばじびやうのしやくがよふけてさしこむまとのつき(全)(三

オ)

おもふおとこになぞかけられてとかざなるまいしゆすのおび(いけのはた錦

光)

おまへひとりがおとこじゃないといふてころでない(上広はる

女)(三ウ)

たとへしうとがおにでもじやでも「常わつげん太」(たてくふむしもすきず
きとやらことしやかぼちやのあたりどしなぞとゆつたもきはづかしい)ほれ
たいきぢですはりこむ(池のはた錦光)(四オ)

おまへゆへならわしやなになりとねるめねないでちんしごと(上広たか女)
なつやせと人にこたへてめにもつなみだむねのふかくさかほへあて(下谷
住人ムチャ)(四ウ)

にようぼもつならしんぞはよしなとしまざかりのむまいあじ(泉通舎房)
あふてうれしきわかれのつらさあけのからすのつらくや(下谷可山人)
(五オ)

しらがはへてもごますりやろしほのからいのでめがまはる(下谷無名)
にようぼもちとはもとよりかくごそれにほれるもばからしい(下谷もゝ
色)(五ウ)

そらははるれどまだはれやらぬ「三代記」(あすをかぎりのおつとのいのち
うたがはれてもそはれいでも思ひきはめたおつとはひとりあのよのゑつのみ
くらさま)むねのくもりはきのまよひ(上広ます女)(六オ)

たがひに一人りでしんぼうしたらはれてめうとなるがよい(大和やの主
人)

なま木をさくよなこんどのしまつこれがなかつにいられうか(すきや丁美佐
吉)(六ウ)

やきもちやよしなよそれほどさきでおもややかせることはせぬ(かうじ丁十
のじ)

とけやらむすめころのはるかぜゆへにほころびせめしいとぎくら(泉通舎
房)(七オ)

うちをせかれてあはれぬこのみ「清元おさんも兵へ」(なむとかく)はしな
がらもまたまやぐちをくるじゆずのたまもおさんのきにかゝる(またのこげ
んもかみだのみ)上広さし菊)(七ウ)

りんきでこゝとをいふのじやないがたまにやうちへもねるがよい(上広ます女)

糸もじれつたいまたゆめにまできるにきらぬむねのうち(すきや丁唄女
きく女)(八才)

まつにかひなきおまへのじやけんもとよりしやうちじやほれはせぬ(上広は
る女)

もよかよへどなこりはつきぬほんにこのみがまゝならぬ(上広なか女)
(八ウ)

ぬしあるわたしをとやかういふは「常わづ五人はやし」(エ、おかしやんせ
あつかはな)かぼちややろうのくせとして(泉通舎房まる)

たてばすはるしすはればたつし糸もあくまでじらすのか(全)(九才)

けふはくるかところのしたくまつにかひなきぎざな人(上広みよ女)
ゆきもつもればこひぢもつもるまつにおそしとおきごたつ(行田ふさ女)
(九ウ)

うきみやつせしあの女郎ぐもこひかぜゆへにみやつす(行田さわ女)
ぎりにもんじやうもつまこもいらぬさけとしんじうするかくこ(下谷さく
)(十才)

眠けさす書写の机やとゞ空(泉通舎房丸誌)

さく丸撰
よし盛画(十ウ)

△三へ△
自序

さても引当ツたりナ当ツたりナ。既に引此小冊も。三編と成ツたりナ成ツた
りナ。なかよ引なツかなが。そふ引じやぞや左様じやぞや。いかにも古今の
大当り。撰者はもとより。梓元の。其よろこびは如何ばかり。時に望み気に
しやうじ。追々編を続穂のさくら木。世間の人情こゝろ意気。穿文句のブツ

ざらい。続いて出ましやう出ましやう

卅延初の夏日 光盛舎さく丸誌(一才)

(絵)吉例

どいつ三べん初日ぜんよみたてのづ(一ウ)

(絵)(二才)

うらやましいぞへあれみやしやんせおしはつがひのなみまくら

かれしばのもゆる思ひのわたしがこゝろそれにおまへはうはのそら(谷鎌
太郎)(二ウ)

太郎(二ウ)

きむすめのかはゆらしさはやえなでしこよはうらにむしめがつきたがる(泉
通舎房)

すがたみへねどあのトこ糸はきいたおぼへのほとゞぎす(全)(三才)
ひごろ思ひしこゝろのやみもはれてうれしきけふのしゆび(文の仲)

おまへのなさはうれしいけれどぎりといふじがじやまをする(中ばしうた
女)(三ウ)

たなばたさんではわしやなけれども「冨本ごん八」(そのかさゞぎのかりね
にもみづももらさぬあまのがはそれもおよばぬことながらたゞのおなごの
こゝろから)あふたトよがうらめしい(上広なか女)(四才)

いまで思つたねがひもみづと「常はづいな川」(まりしてんにもみはなさ
れ)こんなつまらぬことはない(上広さし菊)

人がどのよにいわふとまよみんなわたしがしつてゐる(大茂きん女)(四
ウ)

そらははれてもわたしのむねがはずなみだのあめがふる(河瀬よし女)

しよかいばれしてわしやはづかしいおまへにやたしかにいろがある(池のは
た錦光)(五才)

ぬしのふぎりはくやししいけれど「はうたけさの雨」かみをひきさきまゆげ
をおさへもうしこちの人エわたしのかいなをなんとしよぶ)のろけしことば

をみこまれて(泉通舎房)「(五ウ)

こゝろさだめてかくきねぶみもなみださきだちじがにじむ(さく丸)

おまへやぼならくるふはしないすがみをくふふしあはせ(本郷ほり蝶)

(六オ)

いなづまできやつととびつきいそれなり二いもせかたらふむすびかみ(さしも)

かぜにちらされくさばのつゆがあじきないぞへいじらしい(ゆしまおる

か)「(六ウ)

このさけとめづとのましておくれ「常はづ角兵へ」(すねりやたがひに思ふこといわきならねばはづかしのもりのからすかさぎならせめて一ツねぐらにヲうれし)「しらぶじやいわれぬことがある(池のはた錦光)「(七オ)

かりたかねならかへしもしやうがあげのかねならかへしやせぬ(下のはた錦光)

まめをまくのもひいらげさすもじやまなおにめがこぬよふに(全)「(七ウ)

ゆきのよかぜがみにしみみとおもはずよりそふはだとはだ(上広はる女)

はなはひらけどきはうつつとなぜかひらかぬむねのうち(行田さわ女)

(八オ)

うめがあねならさくらはいもと「とみ本まつかぜ」(ゆきひらさまはこのわしがいへいへなんぼあねさんでもこればつかりはめんめんしがち)「ふたりあらそふいるくらべ(上広なか女)「(八ウ)

おまへ思ふてくろうをするもわたしやすこしもいとやせぬ(田中はん女)

あふよみじかしまつよはながしあけのからすのつらくや(田中もと女)「

(九オ)

すゞめのせんこへるけんはいやよゆしの一トこへつるとき(行田ふさ女)ひるはせつないぢこくのせめもよるはうれしきぬしのそば(下谷きんし)「

(九ウ)

あつさしのぎのゆうすゞみぶねこがれこがれしけふのしゆび(上広なか)ひとよふたよのなさけのみづにうかとさいたる女郎花(可山人)「(十オ)

都々一図会三編

光盛舎作丸撰

一光斎芳盛画「(十ウ)

△四へん

自序

善哉善哉僕机上に向ツて。つらつら都々逸の世に行わるさまをみるに。年移り時替にしたがい。いよいよ流行は此一ト節に際(かぎ)るべし。夫は亦如何となれば。だみたる声にて浅湯から。一ト風呂四文の長松とんまで。ポワイと。唄ゆるならんかあなめでたし

巳延初の夏日 光盛舎さく丸誌「(一オ)

(絵)吉例

文句いりどゞいつ集人稽古のづ「(一ウ)

(絵)「(二オ)

かたくこゝろをうちあけあふてはなしやかへらぬかこのとり(上広なか女)あふてわかれたわたしのこゝろなかぬざしきのきりぎりす(全)「(二ウ)

あたまはげてもおさけはやめぬのまなきやひるまのほたるかご(上広鎌太郎)

ないてふさいでまたちやわんざけまたもやまひのたねをまく(上広はる

女)「(三オ)

ほどもよければよくきもつくがなにをいふにもせにがない(上広さし菊)うめがぬしならわしやうくびすよさかぬうちからまつてゐる(下谷ます

女)「(三ウ)

ちわがこぶじて背中とせなか「はうた」(おくのざしきのつめびきがついなかだちてそれなりにみだるゝかみののしろぐし)「わかれともなきあけのかね

(上広たか女) (四才)

によつぽたゝきだせこはぶみころせあとのしまつはおれがする(池のはた錦光)

くるといつでもまたながざけでもどりにきがつくげたのきう(上広一星)

(四ウ)

ひとのうはさも七十五にちいまじやわたしもたすきがけ(上広一星)

よたかといふてもばかにはならぬおそでつきさよなぞをみな(外?田すみ女) (五才)

思ひきつてもあきらめられぬころでころがうらめしい(下谷一庭)

くもりがちなるわたしがころはれていわれぬむねのうち(下谷可山人)

(五ウ)

いまじやどついふころでゐるか「はうた」(かはいゝおかたをはるばるといなかへやつてあんじられおかはりないかこぶじなか)きいておくれよきさのむね(上広たか女) (六才)

とゝかぬこぢぢにわしやあこがれてばからしいほどかみいちり(上広たか女)

わたしばかりにくるふをさせてかはいのじやないくいのじや(全) (六ウ)

うはきよするやつアふだんでしれるつねにていしゆをしりにひく(泉通舎房)

()

いろはしあんのほかとはいへどつまみぐひしてくちをやく(全) (七才)

ひとのそしりとないしよのてまへ「常はづ関の戸」(まがきのうちよりこてまねぎふいとさせたるうちかけのすそへかくれてなごうかどくじやのくち

をのがれしこゝち)ぬしにあふよのやるせなさ(上広な女) (七ウ)

のきにぶらりとさがりしものはひとがみてさへしのぶぐさ(泉通舎房)

ぬしがきたらばどくづくつもりかほみりやあげたくなるばかり(全) (八

才)

ひごろ思ひしころがとゞきじつにうれしいにいまくら(下谷きんし)

さきじやさほどに思ひはせねどなぜかこちらでわすられぬ(上広もゝ色)

(八ウ)

はなはさけどもきはうつつと「はうた」(こひしこひしとせいげんがまいちどあいたいさくらひめ目さきはなれぬわすられぬ) (こひゆへはてるほとゝ

ぎす(上広な女) (九才)

ふみにさへみひろよひろじやまだかきたらぬあふたそのよをおもひやる(す

きや丁唄女わか)

おとこよいとてほれまいものようはさをきけばくひちらし(同きく) (九ウ)

こひかぜとひとのころにさとられながらおまへにやころがわからぬか

(すきや丁唄女やま)

はやふこのみをおまへにまかせうちによつぽといわれたい(すきや丁宇治

よね) (十才)

(絵) 光盛舎さく 撰

いつ光さいよし盛ゑがく(十ウ)

全五へん

自序

牛の小便十八丁。錦魚の糞の永々と。跡引上戸のモウき合。二合二合四合と

なり。またもおかはり五合目。ふじよりこゑも高てらしまだまだ六合七合と。

跡から追て編を続。意気なお方の作り給ふを。撰むと言では更になし。唯書

抜て梓に載のみ

巳延初の夏日 光盛舎さく丸誌(一才)

(絵) 吉例

光盛舎におみてどゞ一あたりふる舞の図

梅みるやまづ盃をとりあげて(よし盛)

さくらから桜へ行や千どりあし(さく)(一ウ)

(繪)(二才)

よどまりひどまりふじつをつくしほんによのめもあいはせぬ(上広なか女)
うつゝぬかしてひかづをわすれかへりやさゞみのつものたらけ(全)(二ウ)
うれしのやまのみみぢでさへもあきがくりやこそいろをます(上広はる女)
こちらでおもへばあちらでじゃけんいやなひとほどじつがある(上広鎌太郎)(三才)

うはきするのも人まへばかりこゝろでこゝろへげうおろし(大茂内いく女)
人もたのまぬこひぢのくるふこゝろでやまひのたねをまく(上広みよ女)

(三ウ)

まちくたびれたるかうしのさきへ「常わづ大江山」(すねてみせてもあひた
つものねにはあれどそしらぬかほさすがにつきもなきところへ)くればみれ
んでかへされぬ(上広さし菊)(四才)

あきをはてるよおまへのさけにそばにゐてさへふつかゑひ(上広歌沢うめ)
さみだれの一人りしよんぼりたゞうつつとあいてほしさのひとりごと(上
広一庭)(四ウ)

はなれてくらせとこゝろはひとつうれいせたいはいつのこと(泉通舎房
)

あきはわびしきかれのにすまひはるをこいしとまつわいな(光盛舎さく
)

かのかかけるよなおぼこでさへも「常はづお半」(ちいさいときからおまへ
にだかれてならいせいといはしやんしておてほんかいてもらふたり)いろで
きをもむしゆすのおび(上広なか女)(五ウ)

ぬしのしやうわるわたしのかたぎにてもにつかぬゆきとすみ(上広越惣)
あへばいつでもたくさんそうにきずいきまゝもほどがある(上広なを女)

(六才)

つきはさへゆくよはしんしんときたかとでゝみりやわがすがた(下谷木く
清)

あんまりなかせもあらふには辰巳とはぬしが北風東風(こち)はよい
(全)(六ウ)

くろうするのめぬしゆへならば「清元ごん八」(すひなうきよのなんなんな
かをやばにくらしてまちまちの)九しやく二けんがたまのこし(上広芳
盛)(七才)

げいしやづとめもけふこのごろはぬしがあるので上でうし(すきや丁唄女わ
か)

ないてわかれしやまほとゝぎすつきのかほみりやおもひだす(さく)(七
ウ)

さけでまきらしざしきをつとめ客のきげんをとりどりに(すきや丁唄女伊
助)

わらひがほしてつらき日もあるがないてうれしきよはもあり(すきや丁唄女
きく)(八才)

きみはいまごろこまかたあたりないてわかれしほとゝぎす(出子山人)
なまじなさけについほだされておもひきるせがないわいな(上広さしも
ん)(八ウ)

ゆきのよかせがみにしみじみと「はつたゆきは巳」(ひやうぶがこひのなか
だちにてうとちどりのみつぶとん)おもはずよりそふはだとはだ(下谷可山
人)(九才)

すきしくぜつをふと思ひだしねるにねられぬうつゝせめ(すきや丁唄女い
と)

またのあふせとなごりをおしみかへるみちみちうしろがみ(上広鎌太郎)(
九ウ)

やけのゝきゞすやつまこふしかもわしがこゝろにやまだおるか（上広はる女）

とんなひんくなせたいをもちもぬしとゝもならくにやならぬ（ゆしまおるか）（十才）

（絵）（十ウ）

二、『びんいつ葉唄節用集』乙本

菊池所蔵本。題簽に「どゝいつ」葉唄節用集」の題簽がある。「」内は角書。万延元年（1860）序。

類似本に、国文学研究資料館蔵本（ナ1/16）と大阪大学忍頂寺文庫蔵本（G247）とがある。国文学研究資料館蔵本には外題なし。大阪大学忍頂寺文庫蔵本には「都々」はうた節用集」の題簽がある。

菊池本は十丁ずつ五編合冊であるが、国文学研究資料館蔵本は十丁ずつ四編合冊、忍頂寺文庫蔵本は十丁ずつ六編合冊である。どれが初編でどれが二編という表示がなく、柱は丁付けだけであり、三本とも綴じの順序が違う。国文学研究資料館蔵本のすべては菊池本と同じく、菊池本のすべては大阪大学蔵本と同じものであり、丁の並び方が違うだけである。

菊池本二編九丁裏に三遊亭円朝の都々逸が載っているのは特筆される。

以下、菊池本の翻刻。

自序

盛んなる哉都々逸節は。元深川にて専はら行わるところの。よしこのぶしにて「よしこの」「お手なるから銚子の替りめとめがつてみればお客が三人庄家こんこん狐拳」夫を扇歌といふ大僧正。常州より顕はれ出。一流都々

逸と題号して。世上に流行らしむるは。彼僧正が大徳ならんか云々
万延庚申夏の日 光盛舎さく丸誌」（一才）

都々逸の元唄よしこのぶしの意をこゝにあらわす

よしこのぶし「世の中にさむしきものはしよぼしよぼあめに寒念仏山中一人旅

まいこのまいこの三太郎や

「ア、このさむいのにきのどくなことだなむあみだぶなむあみだぶなむあみだぶカンカンカンカン」（一ウ）

全？チンチンチンチロリン

遠寺の鐘合図に

「まいこのまいこのろまつヤアーイのろまつヤアーイドンドンドン
ドンドンチャカチャンチャカチャンチャカチャン

「おんでんでもくればいゝいつはいやりたくなつたへらぼうにさむいもんだ
まいごヤアーイやくまいごヤアーイ」（二才）

ほつとひといきうれしやゆめとさめてとゞろくむねのうち（上広ます女）

ゆめでなりともこゝろのたけをつぶじさせたやわかおもひ（本郷琴二）（二ウ）

さきじやまほごにするのはかくごせめてまくらのかみになと（下谷きんし）

ふでにやつくせすくちではいへぬおほこゝろのやるせなや（上広たか女）（三才）

そらははれてもまだはれやらぬむねのくもりはきのまよひ（下谷の山人）
つらいわかれをこゝろでないてわらふてかへすもぬしのため（上広なか女）（三ウ）

いきなおかたにやほれまいものよほかでもこんなにほれるだる（上広はる女）

ゆくへもしれないわたしのこひはいとめのきれたるとんびだこ(全)「(四オ)

おまへのてくだについのせられておとこぎらいをほごにする(上広なか女)ぬしとみめぐりきはすみだがはそばにいとぎまくらばし(全)「(四ウ)三日なりともそはねばならぬこれもおんなのいぢじやもの(上広なか女)かたいたいといまゝでいわれおまへゆくへではこのしだら(上広相まつ)「(五オ)

まただまされたか丑、はらのたつつらのにくさよあのくひな(房)二せとちかひしおまへとわたしむねきなあくまがみつをさす(さく)「(五ウ)

すひのすひほどはまりがふかい「しん内あけがらす」(けいせい)にまことないとほそりやわけしらぬやばなくちからいきすぎた(ねんきよいれてもよびとげる(よし盛)「(六オ)

うちとそでのいもせのちぎりあがるはしこのだんがない(上広さし紋)かみもほとけももうたのまないどうせそはれざむふんべつ(下谷木くせい)「(六ウ)

ひとにや奴といわれしわたしいまじやおまへゆくへまるぼうづ(上広指もん)げいしやせうばい女ろうにやおとるしやみせんまくらですみぐい(上広藤茂キ)「(七オ)

ほれたふりよすりやあのしやツつらでかゝみとそうだんすればよい(大茂きん女)のろけたふりをすりやあのどたぶくめきぎなみぶりのざまをみる(大茂いく女)「(七ウ)

いやなおかたとそはせるよふなどないつものむねき神(上広鎌太郎)たまのごてんでもひとりねはいやよぬしとそひねのしやくやがり(上広はる女)「(八オ)

かねはわきものおとこにやかへぬびんぼうするほどなをかへぬ(上広さしきく)

おまへ思ふもわたしのいんがおもわれさんすもまたいんぐわ(上広越惣)「(八ウ)やるせないほどほれたがいんぐわ「富本なるかみ」(こひしいわいなさりとてはしばしのうちもわすられぬこひすてうもはやふつとおもひきりさりとてもなさけなや)とてもそはれざいのちがけ(池のはたさや亀)「(九オ)

いまねたばかりにてもにくらしいかねとからすにちや屋むかい(上広すみとち)やなぎにうければなをつけあがりこうもりくつがいたいか(全)「(九ウ)うめにやうぐひすたけにはすゞめおもひあたるなかじやもの(下谷木く清)

かへうた魚づくし
さめにやぶぐきす鮭にはするめうごいぼうだらさばじやもの(全)「(十オ)

(絵)作丸校合/房丸撰/芳盛画「(十ウ)序文にかへて
みつまたになかれ寄る身や郭公

光斎画讃「(一オ)たがひにとびたつおもひをかくしらをきるほどあらわれる(上広さしきく)

すいたおかたにやわしやいのちでもなんのいとをぞつゆよほども(みはし大茂あく)「(一ウ)

ふさくふりをしてはしこのだんでんにきつとゝしたをだす(全内きん)ながいねんきをゆびおりかぞへまてばすぽんとふいとくじ(上広住とら)「(二オ)

うはきなおまへとしりつゝほれていまじやこうかいするわいな(上広なを

女)

すへはどぶでもとうじのところどぶまアあわずにくらされう(上広はる

女)(二ウ)

まつがつらいとそなたにいふが「清元おそめ」(うちをしのんでよぶよぶとこでだがひのやくそくはこゝろもほんにすみたがはひとめづゝみのかはぎしをたどりたどりてきたりける(むりなしゆびしてでるつらさ)上広みよ女)(三オ)

たにまをばみればさかりのあのおそざくらやまがそだちとみさげられ(上広相まつ)

馬く猪卵象へ虎川獺よ牛の狐にやばかされぬ(全相まつ)(二ウ)

うぐひすのうれしなみだかあのむらさめははなをちらさぬようにふれ(相まつ)

かこのとりとはようなをつけたないてもてなすとこのうち(すきや丁小間きん)(四オ)

ひぎにもたれてかほうちながめ「冨本」(小ひな)どうすりやうたがひはれるだる(上広なを女)(四ウ)

ひとめしのんではなしをしたもいまじやたがひにおもてむき(同唄女きく)ひとめおゝけりやはなしもできずどうすりやそはれることじややら(同唄女伊のすけ)(五オ)

ほよつがてらといゝこしらへてあへばなをますしやくのたね(すきや丁唄女と)

はるの日ながにつひうつとりとたからふねこぐひめはじめ(同唄女やま)

(五ウ)

すへのすへまであかしておいてきれるおまへのぎりしらず(上広たか女)すだれおるせしあのやねがふねはこいにわたしのかぢまくら(上広住と

ら)(六オ)

しんではなみはよしさかずとも「清元」(あけがらす)わるいしあんもほれりやでる(上広住与三)(六ウ)

にかいせかれてあわれぬこのみまたのごげんはかみだのみ(うたさはうめ)どてをみめぐりあれみやこどりふうふなかよくみやこどり(全)(七オ)うはきせうばいたがひにすれば「おしゆん」(よのなかをなにととへんあすかがはきのふのふちはけうのせとかはりやすさよひとこゝろ)かたときこゝろがゆるされぬ(上広ます女)(七ウ)

おまへひとりとおみこしをすへて「常はづ大江山」(おかほをみねばきに)かゝりひとのそしりもあだくちもぬしうはさがうれしうて(ひとにやかつがれはやされる(すきや丁小間きん)(八オ)

あだなすがたにいいほれこんでのぼりつめたるだんばし(うた沢うめ)にかいをばいまはせかれてアノウちぢややでちよつとしゆびしてあふられし(上広ます女)(八ウ)

うはきらしいがまアきかしやんせ「冨本うす雪ひめ」(あひみしときはすぎしはるじしゆのさくらもはなざかりほんに思へばきよみづのくわんおんさま

のおなかうどたがひにひとめつゝましく)おもひいだすもつさはらし(上広なか女)(九オ)

こひのしんくにあきかぜもれてこゑもほそるよきりぎりす(三遊亭円朝)おやもとくしんあれならよいといへどねんきがまゝならぬ(三ますやか

つ?)(九ウ)

おまへいやでもこちらじやすいたほかのこのこはもちはせぬ(泉通舎房)ことばとがめはよしてもおくれそちのうはきをかくすため(上広越惣)(十オ)

オ)

(絵)光盛舎作丸撰ノ?光斎芳盛ノ山口梓(十ウ)序文にかへて折句

どうづこえノとんな野郎がノいつしんにノつまらぬことにノぶしづけをし

て「(一ウ)

せくなせきやるなつきよはくるま「五大力」(たとへせかれてほどぶるとてもゑんとじせつのすへをまつなんとしよう)(めぐるつきひをまつがよい)(上広なを女)「(一ウ)

そでをしほりしあのおさがほもけさはひらいてわらいがほ(上広まつ公)こゑはすれどもすがたはみへぬほんににくいよほとゝぎす(全)「(二オ)

ほどもおとこもこゝろもくずで女ほうにりえんがでかかねる(くず要)こまにみすじのたづなをつけてこひのおもにをひかせたい(歌さわきらく)「(二ウ)

つきもくもりのせきじをこへて「長うた老まつ」(いろかにぶけしはなもすぎつきにうそにきみはつなかるゝ)(はれてあふひをまつのかぜ)(上広越

惣)「(三オ) 郎) かはいゝおかたとみづがめへおとししひやくなければあけられぬ(上広鎌太郎) うたゝねをおこせどおこせどためきでおきぬ「同」(はつくせう) (かぜのと

がではないかいな(上広きんし)「(三ウ) みちならぬことゝしりつゝほれたがいんぐわどくくやさらまでしてとげる

(上広一庭) こゝろせきやでしゆびまつよひはへだてられてもまつちやま(上広越宗)

(四オ) つきなたてじと思へどじやまな「長うたまくらじ」(ひとにうたわれゆいたてのくしのはにまでかけられしひらもとゆいのゆいわげも(みゝとくちと

がなけりやよい)(上広越宗)「(四ウ) にはのまつがへあやかりものよいつもかはらずあをあをと(すきや丁唄女

と) 三ぜんせかいにおまへをのけてほかのおとこはめにつかぬ(全唄女みつ)「

(五オ)

さけものまんせうはきもさんせあとおんりよのないように(光盛舎さく)

さぎをからすといふたがむりかゆきといふじもすみでかく(すきや丁唄女

み)「(五ウ) くだぎじやうずにつひのせられて「はうた」(たまされぬきてたまされてす

へはのとなれやまとなれ)(いまじやきれるにきれられぬ)(上広たか女)「(六

オ) ときのあかりにふねつけさせておもひあふたるしゆびのまつ(上広はる女)

あめのふる日はまたひとしほになをも思ひがますかゝみ(上広鎌太郎)「(六

ウ) よべばふためとしつてはあれどあわづに「詞」(アレサゐられないんであり

ますからサかんにんしてくんなましよ) たまにあふのにもうあけのかねなさけしらすの「詞」(マゝもしれつたいむ

ちやばうづのじんすや引)「(七オ) おふたそのよはたかいくせつ「富本夕ぎり」(わしがあんじはうつりぎの

ほかにもしやといゝがゝりしまいつかねばさよふけてせなかあはせてねてみ

てもつぬそれなりにはりよはく(わかれいとしゃあけのかね(本石ほりい

は)「(七ウ) すへのとけないあくゑんならばむすぶいづもがうらめしい(中ばししん)

わたしがいやならつんつんしやんせこちじやあくまでじやうたてる(全)「(八

オ) かげがもてくるあのつまおとはぬしとふたりのつぢうらか(常はづみつ女

ふじゆつがちでもくろつにやならぬことはたりてもどらはいや(清元さと

女)「(八ウ) りんぎぶかひをよくつもらんせぐちになつたもおまへゆへ(上広一庭)

とりかげにねづみなきしてわしやなぶらるゝこれもくがひのうさはらし(ゆ
しまおるか)(九才)

てなべさげよがつゞれをきよが「義太夫しちみせ」(たかおもひくいもひめ
こぜのはだふれるのはたゞ一人りおやけうだいをふりすてゝとのこにつくが
よのおしへ)そひとげないでおくものか(上広みよ女)(九才)

とうが九ツおまへの女ぼつひとつたらねばくろうする(橋や円太郎)

あがるはしこはくろうのさかにのぼりつめてはなんとしやう(橋や円六)

(十才)

(絵)文句入ノ都々逸著作所ノ光盛舎さく丸(十才)

序

二上りに唄ふ唱歌は。都々逸の。仇な文句も世の中に。連て曳出す系道の。

あいたる口にゞりなく。うなり出したる声太(だみ)こえは。調子や節にか
まいなく延る日数に帖数の。ふゑか通人(すいしや)の新作は。義利人情の
二夕筋三筋。引手数多の艶女が「一才」情の底を掻さがし。人丸(すひ)

のすひたる一ト節は。身にしみじみ嬉しさの。さわり文句の乗が来て。欠来
る山口(とひや)の催促に。醜男寄合(あつまりぜい)の速吟を小刀迷(ほ
りや)に何さて売出しを。求めて全盛をまよはせ給へと云々

万延初めといふ臈月 泉通舎房丸述「一才」

あへばたがひのとくとはしれど「常わつ関の戸下」(しゆびと思へどやりて
がみるめまつたぞやヨ、よふきなんしたあいたかつたもめでしらせ)せかれ
りや思ひのますかゞみ(泉通舎房)「二才」

ひらくこよみのゑはうはうれしあきのかたとはきにかゝる(本郷琴二)
かはりやせぬぞへわかばのみどりぬれるたびたびいろをます(中ばしまつ
女)「二才」

たよりないみにたよりができてもとめましたよひとくろう(上広鎌太郎)
きれてしまへどいぜんのことを思ひだしてはなみたぐむ(下谷可山人)「三

才)

たまにあふよにわかれのからす「たつみ八けい」(きぬきぬならぬやまがね
もこんとつくだのつぢらに)まつばかんざしたゞみざん(上広なを女)「三
才」

おもひあまりしおなこのころ「京うた」(こひがつきよかつきよがこひか
ちよときゝたいまつのかげとへどこたへも山時鳥)こへになかねどめになみ
だ(上広なを女)「四才」

ぬしをおもへばまたなをさらによるもねられぬかやのうち(すきや丁唄女わ
か)

かぜにもまれてわしやふはふはとめだしやなぎじやあるまいし(同唄女い
と)「四才」

さきのころもしれないうちに「清元山かへり」(よつやではじめてあふた
ときすいたらしいと思ふたがいんぐわなゑんのいとぐるま)ほれるわたしは
ふかくもの(光盛舎さく)「五才」

きりといふどのふたすじなはでつなぎやとけまいこひのみち(上広越宗)
わたしのきゞくをぬしやしらぎくとそばをのぎくはあきのきく(上広指き
く)「五才」

はおりぬがせるそのうれしさは「中ぶしあさま」(むねのとけいのくるま
のはめぐりめぐりてあけ六ツのわかれにたてしせいもんのせんも二千も三ぜ
んもせかいにひとりのおとこじやとたのしむなかのふかみどり)きせる思ひ
がなけりやよい(泉通舎房)「六才」

わたしやのにさくたんぼのはなよひとにふまれて「詞」(よこのほふへちよ
いとさいた)「すきや丁唄女わか」
むもれ木じやとてこばかにするなむかしははなよ「そゝり」(こりやなすび
のたねじやない)「全唄女きく」(全唄女きく)「六才」

うかれはなしについみがいつて思はずあかすあけがらす(中ばしため女)

よひのさはぎがくぜつとなつてなにかたがひにてもちなさ(上広さく)
(七オ)

すへのとりげんたのしむよりも「はうた」(二かいせかれてしのびあふよる
はむねさへくるぬりの)とうぎのだきねがしてみたい(上広たか女)(七
ウ)

とうぎかるのもみなぎりづくよひとめのせきにへだてられ(田丁さわ女)

あれみやしやんせこのふるゆきにどうしてぬしがかへされう(八オ)

思ふおとこなぞかけられてへんじするのちこもる(下谷木く清)

わたしのこゝろをおまへはさとりまゝもくやししいじらしよふ(八ウ)

むまがおやせはまごまでおやす「はやりもん」(ちよんきなちよんきなちよ

んちよんきなちよんがなんのそれちよんがよい)むまとまごとのき

つねけん「(てらや丁齋徳)」(九オ)

あきもあかれもせぬなかなれどぎりといふじはげひもなや(上広さし菊)

さだめかねたるおまへのこゝろあきのそらではあるまいし(大茂いく)(九

ウ)

みの茄子とがとて木瓜をきられそのうへおまへにや漬こまれ(上広さく)

うちじやまじめでそとではいきな素人苦勞人のうらおもて(上広すみ与

三)(十オ)

(絵)山口屋板ノ光盛舎作丸撰ノ一光齋芳盛画(十ウ)

序

夫詩は有声の画なり。画は亦無声の詩なりと。古語に曰。大津絵端唄の文作

も。さとれぬところは絵にて詠と。ほこりなからに。諸君の案事大盃に引請

て。酒盛主人が管(ふて)まかせヨンヤまかせと。序文もおなじく。傍若無

人の呑仲間すましの文をすゝりにくみて

書子庵醉人述(一オ)

もとうた

けいはうはしごずりかみなりたいことつるべつかおわかしゆはたかをすへぬ
りがさおやまはふじむすめざとうのふんとしをいぬくわへてぎやうてんしつ
えをばふりまはすあらしのおにもほつきしてかねしゆもくひようたんなまつ
をおさへましよやつこのぎやうれつつかがねへんけいやのね五郎(一ウ)

四季

しきのながめのふうけいは人のこゝろもはるがすみはなのくもたなびきてい
づるつぼみのいろざかりひくてあまたのすゞみぶね猪牙の音はしるさゞなみ
にあつさのこしていりしほのあきはさらしなしたのつきくさにはあさがほは
ぎきゝやうかれのにゆきみはふぐとさけとでふゆごもり(泉通舎房)(二
オ)

春はるかぜにさそわれてうめもどりのすいづゝやきさらぎのはださむきは
つねゆかしきうぐひすもまたむすめぎのあどけなくもゝとさくらのいろくら
べ人のめにつくいとざくらとけてねまきのまくら紙引さいて肩げをかくしモ
シにますかへヲやおまへの口には紅がついてるこれはのぼせのましないよ
(泉通舎房)(二ウ)

夏

めにあをば初がつをうる一トこへはてつぺんにばつといふほとゝぎすとんで
ゆくへやふじつくばうのはなくだしはなみどうあまちやに濡てさみだれのか
はくまもなきのほりぎほのきのしやうぶにかぜかほるざしきにはきやくのき
げんにあいさゝもタ立まもなくはれてきかくのものがたり(全)(三オ)

あき

あさがほにつるべとられてとなりでもらふけしやうみつくりあけしはなの
つやしろい糸りあしばつちりとさきしはうすべにみつあさぎかのこしぼりの
べにざきもいまはてぞめのいろざきにからみついたるつるのをときかねし
いろもやさしき紫のてことからみてきまゝにさかせしぬしのはな(全)(三ウ)

(三ウ)

ふゆ

「わたるあさ寒に人のこゝろもわざまぬきゞのははあめとふりきのふのふちはけふのせとかはるみやまのくらしにもしばかるわざもぬしゆへにやてなべさげてもいとやせぬ何のおしかるいのちをも人がみるアレはづかしいこのこたつふとんかければアアレくすぐつたいようれしいネ(全)」「(四才) 流行もの

このごろのはやりものてうれんたいこやほらのかいふきやにはやうきかはしまだのしんなしぶどうねづみあめりかさんぶつ保字こばんにこはまけんぶついき人げうひるさいたのすけ成駒やむすめあきんどてんぐれんりやうりやはいきなたかそで「付」やつてるねうたさはけいこじよこはいろものまね

「詞」ばいばい「(四ウ)

天神記

かいちうわきかれかたかれとあれはどなたのおとふりじやふじわらのしへいこつ「詞うめ」なんときたかさくらまるいまそんぶんいわふじやあるまいかあとからあにきがずつとで「詞?」このまつわうがひきかけたみくるまをならばてがらにとめてみよしへいがにらんでうめまつさくらのチヨンチヨンひようしまく「(五才)

曾我

さみだれのくらきよにたいまつてらしてそがけうだいかたきくどうをうかゞへはしるべのかたはこなたぞとすなまちゑたるうどんげの十八ねんのくもはれてたがひにみかはすかほとかほはじめてひらくゑこまゆいさめどもいまはわかれのにしのそらたけきこゝろもなみだにぬれたるとらがあめ(上広鎌太郎)「(五ウ)

艶色

よのなかをいきにくらすかうしづくりのひとすまるあらいかみいなせふうしやうじのうちはうたさはのしのびごまさへあたなくさおんなこゝろはまはり

ぎなよそのおかたもこのよふにほれすきるほどぐちなきもおまへゆへアレにくらしい人じらしさゝはおよしよそれでもいっつもいけなないよ(上広さしきく)「(六才)

国石?

みちのくをなくなくもおやのかたきをうちたさに江戸へでゝなにたかきゆ井せうせつがなさけにてあねのみやぎのしのぶさへちんがたなぎなたしゆれんしてこけうへかざる二人りづれかたきだん七うちとめてうれしやとゑがほまもなく黒かみのもとゞりはらつてもへきよたゝいてびくとなる(上広越宗)「(六ウ)

同

かたきうちすけだちをなのりもならぬそう六がどぶこぶとむねのうちみやぎのけうだいあはれみてながいねんきをまいてやるこれぞおとこのかゞみかよけうだいふたりはてをあはせありがたなみだうれしさとそのまゝにくるわをいでゝよぶよぶとさがしあたりてほんもふとげるじやないかいな(上広なを女)「(七才)

六歌仙

おくらやまそのなかによくもそろいし六かせんありわらのなりひらははなもいろよい小のゝ小まちわがみよにふる人だのみふみのぶんやもあきのそらむべやまかぜをあらすほどこれぎりおまへ喜せんかへわがいほはみやこのたつみひとりすむそうぜうへんぜうきかぬときはじつに一人りてくるう主(上広うた沢うめ)「(七ウ)

侘住居

よをすねてむかふじまへん二人りこつそりわびずまひたれにきかねもあらばこそゆきはしきりとふりつもるしんにさむいとおきこたつすいたどうしにくせかして思ひすごしのぐちがでゝちはとくぜつを夕げしやうあかねさすしばししらけたざしきをはしやくがとりもちうけてうれしきゆきのはだ(上広

たか女」(八才)

口舌

くるとくぜつでいゝが、りわたしのこゝろはそうじやないせけばせくほどなをつのるあへばうきをなをたてられておんなこゝろのやるせなやかみが見さんへぐわんかけてはやふめうとなるやうにほんによめもろくろくにねむられぬそれにいつまでうかうかとうはきのやまいでほんにおまへはつみなひと(上広たか女」(八ウ)

夏げしき

ゆうだちのふりだしは人さままななぶりものこめだはらやぶれがさははだしてかくだす人もありのきのしたでのあまやどりよふぬにかやをつるごろごろなりだすかみなりのあとからはれゆくなつのそらきすゞしなんの雲なくつき一ツひるまのあつさをわすれてしまふたすゞみぶね(下谷可山人」(九才)

盛衰記

さてもやしまのそのかつせんは思ひがけなきさかおとしべんけいかさきにたちかめ井かたおかいせするがなにも大せうよしつねはござぶねめがけてはしりゆきもんいんさんをちよいとゝらへしなだれかゝるうしろよりのりつねがまおとこみつけたとこへをかけいてひつくりきかうてん八艘飛でよぶよふのこつて助かつた(下谷木具清」(九ウ)

あこや

はんぎは六郎めしうどあこやのなはをときさまざまいたわりてふびんをくわへ思ひかくれどなにぶんかけきよくへはそんなせぬとほかにもらすことはござりませぬいわせもはず岩永左衛門しぶとい女とたちかゝる重忠ちやつとおしとめてこれあこやそれなる三きかへしらべよや五言のはつして四相をさとりち仁勇(上広はる女」(十才)

(絵) 光盛舎系らむ? 光斉芳盛画図」(十ウ)

三、『どゝいつ葉唄節用集』丙本

菊池所蔵本には題簽がないが、玉川大学蔵本(W768.5ノド)には、「どゝいつ」葉唄節用集」の題簽がある。「」内は角書。菊池本は近江八景のうち一丁を欠くが、あとは玉川大学本と同じである。

初編・二編合冊で、初編序には「丁巳はつ春 金龍山人述」とあり、その後に「さく丸系かく」とある。さく丸は挿絵担当である。丁巳は安政四年。金龍山人は梅暮里谷峨二世で、歌沢能六斎・萩原乙彦とも称した。初編末尾には「金龍山人編/光盛舎佐久丸画」とある。「哇節用集一編叙」には「金龍山人述」とあるのみ。挿絵の人物が、初編と二編とでは雰囲気を変にする。二編の画家はさく丸ではないかもしれない。さく丸が初編の挿絵を担当したことは明らかであるが、本文内容にどれほどかわつたのかは不明である。本文内容は、次のとおり。

初編

十二月異名

三保浦富士山之景図

色紙短冊書様并寸法

ちらし文のかきやう

男女相性度独逸(頭書)

年中用文章書様替唱

七小町詠歌度独逸

女日用製服の心得(頭書)

和歌三神生酔

近江八景度独逸

二編

十 香葉唄

銘香名寄大都会

葉唄三夕

文の書様替唄

教訓手鞠唄（頭書）

六歌仙度独逸（頭書）

三十六歌仙度独逸（頭書）

六玉川哇合

伊呂波文字之起源（頭書）

艶道伊呂波度独逸

以下、菊池蔵本により、「色紙短冊書様并寸法」「男女相性度独逸」「七小町詠歌度独逸」「和歌三神生酔」「近江八景度独逸」「六歌仙度独逸」「三十六歌仙度独逸」「艶道伊呂波度独逸」の「どどいつ」を翻刻する。

色紙短冊書様并寸法

ふとした事からついのりがきていまは片ときわすられぬ（六ウ）

男女相性度独逸

男女女木は子五人あり内三人よしはじめくぜつあれどもち富貴なり命もつとも長し

思ふとほりにねがひもかなひ（七ウ）すへもたのしきかみの加護

男女女火はじめよしのちわろし子二人か五人あるべし盆にしてとりわけはら悪き也

（八オ）

神もあはれにおぼすとならばたすけ給へやこのくるふ

男女女土子三人ありたゞしじやけんなれば子にえんなしつねに（八ウ）思

ふことたゑず

人にすぐれた人じやと人にいはれるもみなかねしだい（九オ）

男女女金はじめはよしのちわろし子二人あるべしことにせいじんしてくぜつおゝし

ゑんがなければいまこのやうにつらいおもひもしなかるふ（九ウ）

男女女水うまるゝ子五人富貴にして命ながし

夫婦なかよくふじゆもせずにしたのしく暮すみのくわほう（十オ）

男女女火おゝいにわろし子はあれどもいしよくとも二たらずしてくぜつことあり

むねのほむらでなみだのみづのあつくなるほどものおもひ（十ウ）

男女女土大によし子二人かまた九人あり富貴にして命ながし

すへのすえまでたがいのじついまことあかしてともしらが（十一オ）

男女女木はよし子二人もしは八人あるべしふつきにしていのちながしうしむまにゑんあり

このよはおるかよまたさきの世と（十一ウ）二世をねがふもこひのよく

男女女金はわろし但し半吉のちに人にしらるゝこと有

くらうするのがうきよのつねかむねにたへないうきおもひ（十二オ）

男女女水大にわろし子あれどもひんなりくぜつおゝし

ういめつらいめよにあるかひもなさないみのふしあわせ（十二ウ）

男女女土半吉なにも思ふようにならぬが浮世なり

笠を心にきてよをくらせうへみりやおよばぬことばかり（十三オ）

男女女金大によし子五人ありこゝろのごとくにためでたし

ねがひどふりに思ひもはれてこんなうれしいことはない（十三ウ）

男女女水大にわろし子なし何事も心ならねどのちはよし

心ぼそさよ子のないからだとしがよつたらどふしよふ（十四オ）

男女女木はんきち也のちはよし子は五人もあるべし

すてる神ありやたすける神をいのればめぐみのあるものさ」(十四ウ)

男土女火大によし子五人何事も心のまゝにて無病にしていのちながし

ほれたどうして何不足なくらくにうれしき世をくらす」(十五オ)

男金女金大にわろし子三人あり病おゝし

さわりありがちよいことゝてはとかくすくなきよのならい」(十五ウ)

男金女木大にわろしとかくこゝろにまかせずくぜつことたゑず

しよてからかういふなげきをするとしれてゐたならほれもせじ」(十六

オ)

男金女水大によし子五人ありふつきにしていのちながし

いまもむかしもうれしいことは思ひあふたるふうふなか」(十六ウ)

男金女火大にわろし子一人あれどもいのちみじかしひんにして思ふことかな

わず

なくにやなかれずふさいでばかりゑゝもじれつたいしやばせかい」(十七

オ)

男金女土大によし子五人ありなにごともこゝろのまゝなり

たいけのくらしはきがねがおほひぬしとふたりでらくいんきよ」(十七

ウ)

男水女木子三人か七人ありふつきにしてばんじ大吉なり

ありがたいぞへうれしいゑんをむすんでくれたマ神ほとけ」(十八オ)

男水女水半吉子八人なるべしひんにしてのちわろし

あめはふりくるひはくれかゝるこゝろせきやのさとつゞき」(十八ウ)

男水女土大にわろし子四人ありひんにしてくぜつことたへず

これぎりしんだらみはほんのうのいぬとなるかよこひのぐち」(十九オ)

男水女火は大にわろし子あれどもそだゝず二人りのなかにはらたつことあり

ひとにうちあけわたしのくらふはなせばおまへのはじばかり」(十九ウ)

男水女金大によし子七人ありゆうふくにしてけんぞくおゝし

かないそろつてむつまし月のかづのこだからさんばそう」(二十オ)

七小町詠歌度独逸

小町は出羽の郡司小野良実が女又当澄が女ともいふ絶世の美婦歌道の達人な

り老たることは玉造といふ書にあるよしつれづれ艸にみえたり

草子洗

まかぬたねとてあのうきくさのところさだめずまよひざき」(廿一ウ)

雨乞

ぎりからまれわかれてみればあとでなみだのあめがした

百夜通

かよふよみちのあしはかどらずゆきよりつもるものおもひ」(廿二オ)

関寺

さそふみづとはみのないこひじこゝろうきくさしやうねなし

卒塔婆

そとはかてにかせぐもよいがうちへくる子はおしでない」(廿二ウ)

鸚鵡

うちぞゆかしてきたまだれごしにはなのかほばせゆきのはだ

清水

おちてくだけてゆくたきみづのすへのあふせをたのしみに」(廿三オ)

和歌三神生酔

まつたかひなくよもほのぼのとあだにあかしのうらちどり(小てふ女)」(廿

五オ)

近江八景度独逸

唐さきよるの雨

ちわが募りてくぜつの果の(あらしははれてひとしぐれぬれてあふよはよ

はねてからさきの(まつにかひなきあけがらす」(廿五ウ)

三井の晩鐘

なかさきじたてのしかけをきせて(さとにうつして三井てらやくれてはな
さきかねのこゑ)きやうのじよろしゆのしなかつち(廿六才)

石山の秋の月

よもやこゝろがかわりもせまい(いろの最中かすがたみてるつきなみの
もん日とてやくそくかたきいしやまや)ほんにまつみのじれつたさ(廿六
ウ)

矢場瀬の帰帆

あふたうれしさわかれのつらさ(あゝなんとしやう帰帆もしらで朝むかひ
はやき矢ばせのきぬきぬも)どうぞしみみねてみたい(廿七才)

比良の暮雪

こひがまよひかまよひがこひか(げにはつきくのしろがさねひらの暮せつ
をさなからに)そしてものいふむつのはな(廿七ウ)

堅田の落雁

もしや田面のあのかりかねは(きみがかたゝのふみづかひふけてあを田に
こがるゝほたる)なかでくるしきむねのうち(廿八才)

粟津の晴嵐

またいつおいでかしのれないおまへ(あだにあはづのせいらんとこゝろでと
めしいつゞけに)のろけられたりのろけたり(廿八ウ)

瀬田の夕照

はなもよしはらくるのさかえ(せたのせきしやういまこゝにゆぶぐれてら
すなかのちやう)はりといきじのいちもんじ(廿九才)

六歌仙度独逸

ねてもさめてもおまへのかほが目さきにちらちらゆめうつゝ
をれるばかりぞ其名にめでゝつゆをふくめるおみなへし

なま木ふきさくむねきならし秋といふじがにくらいし(七ウ)

思ひまわせばこひしきつらさ雁はなけどもたよりなし

あへぬほどならいつそのくされ世をうづ山の山ごもり
花のいろかはうつろひやすしどふぞ未まで見すてずに

三十六歌仙度独逸(八才)

柿本人麿

ほのぼのとあかしの浦の朝ぎりにしまかくれ行く
ふたつまくらをならべたまゝで一夜あかしのうらみごと

紀貫之

さくらちる木の下風はさむからで空にしられぬ雪ぞふりける
さくら色ますうれしいゑにし空にしられぬ雪の肌(八ウ)

凡河内躬恒

いづくとも春のひかりはわかなくにまだみよしのゝ山は雪ふる
春の淡雪つとめのからだ肌身よしのも解易い

伊勢

三輪の山いかに待みんとしふれともたづぬる人もあらじと思へば
人にやきかれずゆくさきやしれずたぬるたよりもなくばかり(九才)

中納言家持

はるの野にあさるきゞすのつまこひにをのがありかを人にしれつゝ
とぼけてゐたとてわけある中が人にしれずにゐるものか

山辺赤人

わかの浦にしほみちくれればかたをなみあしべをさしてたつ鳴わたる
潮もみつれば又ひく道理恋もつのがわかれぎは(九ウ)

在原業平

世の中にたえてさくらのなかりせば春のこゝろはのとけからまし
咲たさくらの色香にまよひ心がらとて此くろう

僧正遍照

たらちねはかゝれとてしめぬば玉のわがくるかみはなでずやありけむ

親にもらふた此くるかみを切て男の胸をすえ」(十才)
素性法師

見わたせばやなぎさくらをこきませて都そはるのにしきなりける
柳さくらをみやこのけしきさかへさかふる君が御代

紀友則

夕さればさほの河原の川風に友まどはしてちどり鳴なり

寒い夜風に身をすりよせてうれしなきにかなく千鳥」(十ウ)

猿丸太夫

をちこちのたつきもしらぬ山中におぼつかなくもよぶこ鳥かな
たつきしらぬ旅路にまよひ心ぼそさよよぶこ鳥

小野小町

わびぬれば身をうき草の根をたへてさそふ水あらばいなんとぞ思ふ
今は後悔根もたへだへにさそふ水まつ浮水草」(十一才)

中納言兼輔

みじか夜のふけゆくまゝに高砂の峯の松風吹かとぞきく

君を松風ふけゆくまゝに夏も夜長のうきおもひ

中納言朝友

あふことのたえてしなくは中々に人をも身をも恨みざらまし

なまじ首尾してあひひきせずはたがひに袖はぬらすまい」(十一ウ)

権中納言敦忠

伊勢の海ちいろの浦にひろふとも今はなにてふかひかあるべき

不実としらすにほれたが悔しゑんをむすんだかひもない

藤原高光

かくばかりへがたく見ゆる世の中にうら山しくもすめる月かな
恋にやつれた二人りがなかを見るもいぶせき月のかげ」(十二才)

藤原敏行

秋きぬとめにはさやかに見へねども風のおとにぞおどろかれぬる
つき出されるのもしらずにのろけ今さらおどろく人ごゝろ

源重之

風をいたみ岩つつ浪のをのれのみくだけでものおもふころかな
ほれた思ひを岩つつ浪のわれからくだけでものおもひ」(十二ウ)

齋宮女御

琴のねに峯の松風かよふらしいづれの緒よりしらべそめけん

琴をしらべてこよひも早く君のかよふを松の風

大中臣頼基

一ふしに千代をこめたるつえなればつくともつきじ君がよはひは
かう成るからには此すへかけてぬしを杖ともはしらとも」(十三才)

源公忠

ゆきやらで山路くらしつほとゝぎすいさひとこへのきかまほしさに
たつた一ト声おもはせぶりなあのほとゝぎすの罪つくり

壬生忠岑

子の日するのべに小松のなかりせば千代のためしに何をひかまし
千代もかわらぬ契りをこめて君と子の日の小松ひき」(十二ウ)

源宗于

ときはなる松のみどりも春くれば今ひとしほの色まさりけり

春はなほさらみどりも深くみさほめでたき松の色

源信明

こひしさはなれじこゝろにあらねどもこよひの月を君見ざらめや
義理にせかれてこよひの月をわかれわかれに見るつらさ」(十四才)

藤原清正

天津風ふけ井のうらにゐるたづのなどが雲ぬにうつらざるべき
別れてゐたとて又もともとなるはたかひの実と実

源順

水のおもにてる月みをかぞふればこよひぞ秋のもなかなりける
水にてりそふ月かげ見ても秋のもなかは気にかゝる」(十四ウ)

藤原興風

誰をかもしる人にせん高砂の松もむかしの友ならなくに
わかれになるとも手きればとらず兄や妹となるがよい

清原元輔

秋の野の萩のにしきをふる郷に鹿のねなからうつしてしかな
萩のにしきのうつくしづくに秋になるのでやがて散る」(十五オ)

坂上是則

みよしのゝ山のしら雪つもるらしふるさとさむくなりまさるなり
人はしら雪わたしの思ひ日をふるまゝになほつもる

藤原元真

咲にけりわが山里の卯の花はかきねにきへぬ雪と見るまで
おもふにまかせぬ世を卯の花は咲どひらかぬ胸のうち」(十五ウ)

三条院女蔵人左近

岩はしのよるのちぎりもたへぬべしあくるわびしきかつらぎの神
何と岩はしちぎりもたえてあふもわびしき顔とかほ

藤原仲文

有明の月の光をまつほどにわかよのいたく更にけるかな
待もせぬ月は有明こよひもひとりまろねするのかけつたい」(十六オ)

大中臣能宣

ちとせまでかぎれる松もけふよりは君にひかれて万代やへん
ぬしと二人で百年千年万代までもくらしたい

壬生忠見

やかずとも草はもえなむかすがのをたゞ春の日にまかせたらなん

今に切るよあの浮気いろやかずと捨ておくがよい」(十六ウ)

平兼盛

くれて行秋のかたみにとく物はわがもとゆひの霜にぞありける
元結(もとい)ぎわからふつつり切て秋のかたみと投てやる

中務

秋風のふくにつけてもとはぬかなをぎの葉ならば音はしてまし
おとづれせぬのはもう秋風が萩の葉ならで声もせず」(十七オ)

艶道伊呂波度独逸」(二十ウ)

いろになるみのゆかたもぬいてすはだじまんの夏の富し
るんよりせうこをとられてないていひわけするとはばからしい
はかない糸にしとてんからしれてむすぶもふとしてきこゝる

にしも東もしらないものをつれてうわきな旅かせぎ」(二十一オ)

ほれた女房のあるその人になんでこんなほれたらう

へびに女房がなられちやこわいいろはししないとあきらめた
とふから心にほれてはぬれどどふもいひよるしほがない

ちわがつのつて根もないくぜつはらをたつたりたゝせたり」(二十一ウ)

利口だと思つてかゝるはおまへがばかよそばの二はいもくつたやつ
ぬれてあふ夜はねてから崎のまつにかひなき明がらす
るすをねらつてとろばう猫が来てはちよこちよこぬすみぐい

おまへじゃ気をもみ女房にヤキがねはしやいのちもつゞくまひ」(二十一
オ)

わたしも女子じやいひたいこともぬしのためだどがまんする
かわゆかりじついつくしたわたしのかほを今さらふみつければ腹がたつ

よそふと思へど又かほ見ればどふみもみれんで立かへる
たまにあふゆへはなしがのこるしみじみだきねがして見たい」(二十二ウ)

礼義であつきお屋しきさんはけつつくわけなくとりみだし

それほどあのこがかわいゝならばわたしにみれんはあるまひに
つれてにけるとおまへはいふが女房をすてゝはいかれない
ねる間もないほどおふいそがしや金の勘定でかたがはる」(二十三才)
なんぼほれても見すかされてもばかにされてははらがたつ
羅漢さまでもきものはまとふはだかじや道中もできまいよ
むりなくぜつになかせておいて寝るとはあんまりむしがいゝ
うたゝねのさめてためいき心のもつれ人にやはなせぬ此しだら」(二十三
ウ)

いけんするほどなほやけになりかんしやくおこしてやつあたり
のろけてみんなになぶられながら思はずしらず口へでる
おにのやうでも心のうちはべんてんさまでもかなやせぬ

くろうつするのはてんからかくこいきなていしゆをもつからは」(二十四才)

やみとおまへにかういれあけてすへはどふせうこうしさき
まわしべうぶのたをれたえんどなりどうしのおちかづき

拳もぐんしをしようといふはかねてむほんの下ごゝろ

ふとしたことからついのりがきて今じやかた時わすられぬ」(二十四ウ)

こんななげきも思へばほんにむすぶの神がうらめしい

えんがありやこそ高峯のさくら折て手いけの花にする

てまへがつてのわがまゝいふもなごどひらずの夫婦中

あどけないのがかわゆいけれど初心すぎるもじれつたい」(二十五才)

三味せんまぐらの身のふしだらわがみながらもはづかしい

きがねくろつともみなおまへゆへそれに今さら切ことば

ゆふしごけんたとゞひと筆につなぎとめたる初会文

めつきでしらせてさとれといへどさとつてみながらしらぬかほ」(二十五
ウ)

みれんらしいかたゞひとことをいつてやりたいことがある

しみみとあへぬつらさのつくかんしやくよかつもじれつたくなるものか
えん切櫃でさこうとしてもほれたどうしにやきゝはせぬ
人にやいろいろかといはれてあれど義理をかゝぬがたのもしい」(二十六才)
もとをたゞせば他人と他人あらひだてすりやぬしのうち
せなかそむけていゝたいこともがまんしてねる其つらさ
炭をつぎつぎ火ばしを筆にあつい男のかしらもし

けふとけふねがいも協(かな)ひはれて是からともしらが」(二十六ウ)

四、「文句入都々逸」(仮題)

菊池所蔵本は表紙・裏表紙とも欠けており、本文十丁を紙擦で綴じたもの。
書名は不明。蓬左文庫『どゞ一合本』(尾19156)は、五種類の本を合わ
せたものだが、その最後の「文句入どどいつ(作丸撰)」は菊池所蔵本とほ
とんど同じである。相違点は、蓬左文庫本の末尾には十三書肆連名の刊記が
ある点のみ。

また、上田市立図書館花月文庫蔵『五十三次都々逸節用集』(3811)の中
の十丁が菊池所蔵本と全く同じである。

以下、菊池本の翻刻。原本に丁付けがある。

どうかしてどうぞあの子とノいつまでもノつがひはなれずノふしどをとも
にノ序にかへて折句」(一才)

はなのづえにあのうぐひすがきてはちらちらまよわする(すきや丁唄女
ち)

あたらさくらのあれあのはなをむねきなことりがちらすそへ(全唄女
い)

思ひごととしてついひじまくられんじのかねのねにむねせまる(全唄女ます玉)

つゝめどもたへぬ思ひをしのぶの乱なにかよぶすであらはれる(全唄女わか)(二オ)

さみだれにぬれてこゑますあの時鳥ないてくらすがいとしらし(全唄女ろく)

つとめするみともへぎのかやはひとにつられてよをあかす(全唄女かね吉)(二ウ)

ふさぐやさぎにきたよといへば「常わづ大江山」(すねてみせてもあいたさのむねにはあれどそしらぬかほ)きげんなをしてわらひがほ(常盤津小松太夫)(三オ)

ひのしかたてにこそでのしわをそれといわずにあてこする(下谷木ぐせい)おやのかんどうかねてのかくここうなるうへはぜひがない(泉通舎房)(三ウ)

おまへ思へばてる日もくもるはれてあはれぬかさのじやう(上房さらさ忠)さけといるとのつきよじやないかすひにくらすがみのかはふ(全きんし)(四オ)

おまへもかせぐしわたしもともに「はうた」(すひなつきよをこひゆへにやぼにくらすもこころがら)せたいじみたもぜひがない(下谷木具清)(四ウ)

ひとりねをむしとかねとがりんきでおこすゆめのかよひじさめさする(下谷千ヤ)

ひろいせかいに五しやくのからだとなんことでもするがよい(上広さし菊)(五オ)

つきのまるさとこひぢのみちはゑどもいなかもおなじこと(上広はる女)二せといふことたがさだめしぞそんなことではあいたらぬ(上広鎌太郎)

(五ウ)

ともかくにもおいへのだいい「清元おかる」(それそのときのうろたへものにはたれがしたみんなわたしのこころからしぬるとのみをながらへて)ほるにしあんはないかいな(上広なを女)(六オ)

ひとめなければなにこのやうにこがれあはづにゐるものか(一庭閑人)まつよふけゆくあのほとゝぎすないてあかすのつぢうらか(全)(六ウ)

ぬしのためならこれさきどなくなるうしんくもいとやせぬ(上広相まつ)つきくさのたへてねもなきおまへのこころみづにあはづにくらさりよか(す

きや丁小間きん)(七オ)

おまへゆへならてなべはおるか「詞」(おはなかうじんまつ)のりやひめのりせんかうふのりはよろしふト(いうてもいつしやうそひとげる)(光盛舎さく)(七ウ)

ぐちはおんなのくせとはいへどそれじやとぼでもできはせぬ(秋さはかめ女)

せけんのはさとおまへはいふがひとがないこといゝはせぬ(全)(八オ)どこまでもしらをきらんすおまへのこころそれじやわたしがいやなのか(中ばしただ公)

ほれたふりをすりやうぬぼれがつよいていしゆきどりてめへづけ(全)(八ウ)

いやだよいやだよおきうはいやだ「二上り」(でんでんたい)こもねだるまいせうじのかみもやぶるまい(そしてはなくそもとりやせまい)よし盛(かへうた)

いやだよいやだよおんりようはいやだ「同二上り」(さけものむまいおはなもよそふ)そしてじんすけもやめにしよう(九オ)

おへやじやしかられおまへにやぶたれむりもたいがいほどがある(宇治よね)

ひとのしゃくりにくづくついふなてめへをみすてることじやない(ふじ間なか)(九ウ)

くぜつしらけてものをもいはずぐつとだきしめかほとかほ(京ばし?女) ほうづぎらいとくちではいへどまるいくちにてころがされ(本は某)(十オ)

さく丸系らむ

よし盛系がく(十ウ)

五、『都々逸種瓢箪』

菊池所蔵。表紙欠。見返しに「どゞいつ種本ノ光斎」とあり、序題に

「都々逸種瓢箪(ひさご)」とある。序記に「酉の秋 さく丸述」とある。

酉は文久元年(1861)か。

関西大学図書館に『どゞいつたね本』がある。911.65/K7/26。表紙に

「どゞいつたね本ノさく丸撰ノ芳盛画ノ福忠板」とあり、見返しに「どゞいつ種本ノ光斎」とあるが、中味は菊池本と全く異なる。

蓬左文庫に『都々逸種瓢箪』がある。(これは序題によるもの)尾19-162。

序丁と第一丁及び最終丁は同じだが、他は全く異なる。この本の表紙には

「どゞいつづけ 初へん 了古画」とある。次項の「どゞあつづけ 一へん」とは中味が異なる。

以下菊池本の翻刻。丁付けナシ。数字は仮。

(表紙欠)

どゞいつ種本 光斎(見返し)

都々逸種瓢箪(ひさご)

今世の中に専ら流行る。端唄の一ト節。そが中に。一寸たれにも取付安きは都々逸の一ト節也。頓声(どみたるこへ)でどなつても。先で調子をあわせてくれ。おまはん誠にお上手だよ。廻りうたひにいたいまほう。今度はおまはんの番だよト調子を直して。トソソソエ、きたまだエ、ハツヤツチヨルネ コリヤサ、サエ、

酉の秋 さく丸述(序オ)

(絵)(序ウ)

(絵)(一オ)

つもるこひぢのこゝろをあかしとけてうれしきゆきのはだ

うそとしりつゝきやすめじやうずふわとのりますくちぐるま

ぼたもちのくせにこてこてきなこをつけてしかもよくみりやしゝツぱな

(一ウ)

うるさからうがいわねばならぬいわざおまへのみのふため

ちよつとごらんなあのおしどりかこれみよがしのめうとづれ

つばめたのんでことづてすればかりがもてくるそのへんじ

おかやきもちだとわらはばわらへきけばもちもちむねがこげ(二オ)

むかふかゞみにたばこのけむがちよつとなかをばとふりぐも

人がしやくろがわしやきればせぬやつこだこをばみるにつけ

かうなるからにはどけうをすへなかみなりかみなりやらうはふりつける

てうとちどりはけうだいなれどやんまとんぼはかたきどし(二ウ)

いりあいをかねてまつみはのきばのくものいのもつれもきにかゝり

いのもつれもいひとけしなくあえばくもなしうさもない

けさもけさとはしらであたまあいたかつたとめになみだ(三オ)

ひとすじとばかりおもひしあのおさがほもいつかとなりへかくれざき

あさがほのかくれざきしてつゆにはぬきていつかとなりがたねをもち

いつそりんきのつのもはやしついでやりたいひとがある

ぬしにりんぎのつのもはへりやいつそどうせう道成寺」(三ウ)
たつしやもでのろけがやまひいしやとおなじくかこで出る

むかし馬道いまかこのみちかよひくるわにこひのみち
うちのくろつやきかねもわすれせかいちがいへよつでかこ
人のかよふをばかだといふていまははかたといふだらう

いろのしよわけをしらねへいけんかよいだしてはやめられぬ」(四オ)
それれない事としあんにしあんをしてもなぜかしあんにまだしあん
しあんづくにてそはれることがぐちにまよふもこゝろから

おやはにしきをきる身といえどぬしと手なべでくらしたい」(四ウ)
三味せんのあだなるいといひきこまれみすじみすぎもわすれはて
みすぎよわたりそれではひかぬほれたにばちもあたるまい

かんがへて見てもわからぬよるかよふこひはしあんのほかのもの」(五
オ)

まつのたいふといわるゝ身でもとはかむろのみどりから
梅にうぐいすぬしにはわたしはなれぬなかだとあきらめな

二世とちかいてむすびしえんのきれたゆめ見てしやくのたね
あきのおふぎと身はすてられてつらひくろつにほねををる
ひとりつくづくざしきにひとりこゝろぼそさにちやわんざけ」(五ウ)

手なべぐらしをいとわぬきならふたりかまわぬくらしせう
あくえんといふはたがいにたらはぬしあんそうてそわれぬことはない
そうてそはれぬなかもないがねんのながいがまちどふい

ひとをのろわばあなふたつだとおもひきられぬほれぬいて」(六オ)
ひとのはなとてとるまいものかとられたおまへがいくぢなし
いくぢあるとて物にもよるがあつかましいぞひとのはな

見さだめたまことがなければこゝろのまとなんぼやたけにおもふても
わしがまことをしらぬかなんぞほかに見せたいまとはない」(六ウ)

女ふたりがはなすをきくにいつもおとこのさたばかり
さたをするともおとこのやうにせけんかまはずいゝもせぬ

わがほれりやひともかうかとじやすいのぐちでかた時はなれることはいや
あふてのちおもひまはせばいよいよぐちよふかくなるほど人よりも」(七
オ)

むすほれしえにしのいとほどふしぎはないよいまはからまるとこのうち
よのあけぬ国があるならふたりがすんでつもるはながして見たい
千のきせうでからすをこらしぬしとあさねがして見たい

あさいとのよれつもつれつもつれつよれつすえはほどけぬえんとなり」(七
ウ)
なみだもろひとわさびにまでもあまく見られる身のひごろ

せうじびつしゆやり出ていたあとはとがなききせるをたゞきたて
やぼにしていきじをはるのあはゆきならでまぶにとけるではらがたつ
はりつめて見れはいくぢで身はなつごふりとけてしまへばたゞの水」(八
オ)

したえだのまゝなるはなはこゝろになくてとゞかぬこずえにくろつする
こずえとてまゝにならぬでわしやなければもまこととゞかぬそのわけさ
ゆきくれしひとにやどかすあるじのはなもあさのわかればそでのつゆ」(八
ウ)

↑七丁・八丁は『どとゝあつづけ』一へんの五丁・六丁と同じく

あふさいあふさいよろこびありや「長うた舌出し」(とゞはひとへにありが
たき花のお江戸の御ひぬきをかしらにおもき立ゑほし」(ほかへやらじとだき
しめた(三門やてる女))

ぶたれたゞかれその手にすがり「しんないふちかつら」(わたしがつよくさ
からはゞすいなおまへのお心がかはらしやんすであらふがの)わけをいはね
ばわかりやせぬ(とこ藤)」(九オ)

ほれてわたしがほめるじやないが「清元おちうど」(こんな象にしがからやうのおしのつがひのたのしみに)なふられたいのが身のねがい(八尾松)そもやふたりがそのなれそめは「常はつおふさ」(ふみてくどかず人たのます心のじつをうちつけに)思ひに思ふてけふのしゆび(栄次)(九ウ)

八丁は『とんぼ』の二丁と同じく
きんとき

きんとぶがきんとぶが馬をとばせてふんどしよかけて二ぶはくさいとかいで取さしこめぎんきやうししやなりのいみ玉の王さまあやまらせじゆん王国王かくうちのしんいくさしよぎもまけからしますしよぶがたきがあつまりて(八尾源)

りんきふかいかやきもちなのか「とみ元松かせ」(ことはとがめ?むなづくしとりがうたへばわかれがいやではなれともないなかなとりそれがこいじのつねかいナ)ほれりやたれしもぐちがでる(芋かつ)(十オ)

雪はともへ

さいとつぼざらぼんとふせしよぶぶとこゑが中たがへてふとでられてみのふとんあんかはもたれぬむらぬまだくちがないではないかいな(栄次)たよりない身にたよりができて「長うた」(あかますがりのふですさみこ)につよさをしるしけり(八尾源)(十ウ)

むねに手をおきふでとりなをし「とみ元こいな?みへ」(ふみのたよりですましてもあはずにいれはきにかゝり)とふかきやまこととやら(八尾源)

はなのさかりは向じまさして「長うた」(野辺のあそびもよねもなくこりやたがめいきちちやなもちやか?の葉ちんがちがちがらこはしりはしりついでさきへゆくのはさかやのおてんば)あとへさがるはおまはりきつねけん(?)金(十一オ)

じつとたきめとめをみ合「常はつ新??ま」(ぬいでは?くたびころもつ

すきちきりの???)
(ころでないてもわらいがほ(紺?)

わたしのしよばい朝からばんまでおしゝをかぶつて「とみ元くらま」(大みそかもんじつももゝ引がけのたびかぐらわれとうかれる道しはに)しよのまねしてよをわたる(三門やでん女)(十一ウ)

十一オは『とんぼ』の二丁と同じく

おとこなきとてこのマアくるふ「しんないらんてふ」(しよばい)とはうはのそら(どふかしあんがあるまいか(紺政)

いろになれとはそりやうそらしい「ときはつせきのと」(いつたいそさまのふつぞくははなにもまさるなりかたちからまゆずみあほふして又とあるまいおすがたで)じつにま事とおもはれぬ(とこ藤)(十二オ)

たなのだるま

あまりしんきくさゝにしきのはなふだちよいとまいて手やくとつたりマゝわらつても見たり(芋かつ)

あまりしんきくさゝにあなのなまめちよいとたづねはつものしめたりマゝくさいのも見たり(紙栄)

あまりしんきくさゝにかりたくのおいらんをちよいとかいにげいしやあげたりマゝおとらせても見たり(三河やでん女)

あまりしんきくさゝにうちの山神をちよいとねかしちやうすさせたりマゝうしろからのしたり(大金)(十二ウ)

ま事あかすにうたぐりぶかい「常はつ」(まくらの下へやる手さへつとめにはなればからしく)これでもうたがいしやんすのか(大金)

たもとにすがつてなみだをおさへ「トコへ」(男心はむらしい女心はそふじやない)ひとことわけをきかさんせ(紺政)(十三オ)

すいたどふしはめもとでしれる(これはしたりめんぼくないモウこれ迄はいくたびかもふいはふかいはふかと口まではぞろぞろでたけれどいゝだしかねておりましたどぶぞおまへにゆめになとしらせたいと思ふからマアマアしか

きやのばんとふ様ともとわれる？があさくさのお地藏様へ七日のあいたはだしまいりをいたしましたわいなイヤもふお地藏様へこれは私がいんぐはてござりますどふぞこのこいかなひますよふにたつたいちどてよござりますがまたは少々はんぶんでも四半ぶんでもかんにんいたしまするといつしんかけてねがふたらサアサアお地藏様のこりやこりやといふものはイヤもふトントあらそはれぬものじやはいおまへさまが私にそれほどまでしんじうたつてこんやのむこがいやじやとはこれマアうれしいぞへかたじけないわたしがわるけりやあやまるふすねずにおこまさんこつちやのほふをむいて下さんせ？？いナアナアア、わたしやさつきにから手をあはせておがんでばかりおりますはいナア（くどくよふではできはせぬ）（八尾源）（十三ウ）

いろのいのじをふたりでおぼへ「清元おそめ」（なにやらそうしへかいたのをそなたに見せてとふたらばこいといふじといふたのをむすびはじめのこのじやと）思ふまもなくけふかぎり（栄次）

はたでどのよにわらふとまよ「清元山がへり」（おやがしかろがせかんしよがまよのふこれほれたとのさがすてらりよか）「常はつづつば」（をく山のさいかちばらのなかまでもおまへとならばどこまでも）そふて見かはす人のかほ（八尾源）（十四オ）

百たびいふてもぬしある身では「とみ元」（くどいふのがおまへのくせよなんぼそのよにせかしやんしても）みさをたてたいこころざし（芋かつ）はなのつぼみとこいじのふみは「長きよ」（一寸めさきにふでそめていとこいいのじをかゝんすかあはでこがれていさんすかそれでもいますますさを（ひらくあしたをまちかねる）（八尾松）（十四ウ）

↑十四丁は『とらぬつげ』一八の三丁と同じく

きやすめきいてもうれしく思ひ「とみ本」（どぶで女ばにやもたさんすまいわたしばかりがほれていてうそのへんじをま事とおもひ）かげしやさだめしきらふたる（芋かつ）

めうとやくそくおよびもないが「常はつ」（ありの思ひもてんとやらどぶで女房にやならぬけれど）せめておそばでみやづかひ（紙栄）（十五オ）もようつたへたさてなさけなや「しんない」（たとへこの身はあは雪とものにきゆるはいとはぬがこのよのなごりにいまいちど）あふてつよみがきかせたい（八尾松）

このよでそはれぬあくゑんなれば「常はつ」（あのとらまちをでぬさきはわたしとりもしぬかくこ）はすのうてなであらせたい（栄次）（十五ウ）

↑十五丁は『とらぬつげ』一八の四丁と同じく

わたしのねがひをきいてもおくれ「常はつ」（おまへとだかれてねるならばおさつやすきないしいしをたちものしだにくひかへ）恋ゆへくひけもいらます（八百松）

ふではかはひやはなれていても「しん肉夕ぎり」（しらかみにかくふみのつてへんじとるてもこころせき）こいしゆよかのたよりきく（とこ藤）（十六オ）

大こうりまくそさらつていゝ事するか「わかもの」（こいのおもにをかたにか）（これでもばんにやおきやくさん）（紙栄）

心さだめてあはさつさんせ「しん内明からす」（とぶてしなんすかく）なら三つの川もこれこのよふにふたり手をとりもるともに「おはん」（ほれたがいんぐはかんにんしていつ所にころしてくださんせ）それぢやおとこもよばせぬ（芋かつ）（十六ウ）

うはきものじやといわりよとまよ「清元山がへり」（よつやではじめてあふたときすいたらしいと思ふたがいんがなゑんのいとぐるま）（めぐりあふたもいんぐはどし）（八尾松）

くがひのわたしにま事をいはせ「ときはつ忠信」（まことあかしのつらみなくそしてあかすがじつのじつの）（うそはおまへにせん）（高松八）（十七オ）

小ぐらの野辺のひともとすゝき「露はをばな」(露はをばなとねたといふをばなはつゆとねぬといふあれなたといふねぬといふ)いつかほにでゝあらはれた(とこ藤)

あゝもしれつたやそらとぶとりは「清元松風」(あのとときさへも女夫妻のもろつばさ)ゆくにやゆかれづかごのと(三河やでん女)「(十七ウ)

へのやうなねがひなんぞとわらわばわらへおさつでしよくせうがしてみたいみぎとひだりにとうなすおさつおいていつせうくらしたい

さけもやめよがたばこもよさうやめてやまぬがいものみち

うめぼしのやうなおやちもそのまへかたははなをさかせしすひのはて「(十八才)

(絵) さく丸撰「(十八ウ)

十八丁は『どゝゝあつづけ』一へん『の七丁と同じ』

六、『どゝゝあつづけ』一へん『

菊池所蔵。表紙に「了古画」とあり、巻末に「さく丸撰」とある。本文七丁、丁付けナシ。

東北大学図書館狩野文庫に『どゝゝあつづけ』二へんがある。本文七丁、丁付けナシ。表紙に「了古画」とあり、巻末に「さく丸撰」とある。東北大学本の一丁めは菊池本の一丁めと同じであり、東北大学本の一丁めは菊池本の四丁めと同じであり、東北大学本の七丁めは菊池本の七丁めと同じである。以下、菊池本の翻刻。(丁付けは仮のもの)

どゝゝあつづけ 一へん 了古画「(表紙)

あふさいあふさいよろこびありや「長うた舌出し」と？はひとへにありが

たき花のお江戸の御ひみきをかしらにおもき立ゑぼし「ほかへやらじとだきしめ？」(三門やてる女)

ぶたれたゞかれその手にすがり「しんないふちかつら」(わたしがつよくさからはゞすいなおまへのお心がかはらしやんすであらふがの)「わけをいはねばわかりやせぬ(とこ藤)」(一才)

ほれてわたしがほめるじやないが「清元おちうど」(こんなゑにしがからやうのおしのつがひのたのしみに)「なふられたいのが身のねがい」(八尾松)「そもやふたりがそのなれそめは「常はづおふさ」(ふみてくどかず人たのま)「ず心のじつをつつけに」(思ひに思ふてけふのしゆび)??」(一ウ)

むねに手をおきふでとりなをし「とみ元こいな?みへ」(ふみのたよりですましてあはずにいればきにかゝり)「とふかきやまことがとゞやら」(八尾源)

はなのさかりは向じまさして「長うた」(野辺のあそびもよねなんなくこりやたがめいきちゝちやなもちやか??)の葉ちゃんがちがちんがらこはしりはしりついてさきへゆくのはさかやのおてんば(あとへさがるはおまはりきつねけん(？金)「(二才)

じつとたきめとめをみ合「常はづ新??ま」(ぬいでは?ぐたびころもつすきちきりの???)「こゝろでないてもわらいがほ(紺?)

わたしのしよばい朝からばんまでおしゝをかぶつて「とみ元くらま」(大みそかもがんじつももゝ引がけのたびかぐらわれとうかれる道しはに)「しゝのまねしてよをわたる」(三門やでん女)「(二ウ)

いろのいのじをふたりでおぼへ「清元おそめ」(なにやらそうしへかいたのをそなたに見せてとふたらばこいといふじといふたのをむすびはじめのこのじやと)「思ふまもなくけふかぎり」(栄次)

はたでどのよにわらふとまゝよ「清元山がへり」(おやがしかるがせかんしよがまゝよのふこれほれたとのさがすてらりよか)「常はづうつば」(をく山

のさいかちばらのなかまでもおまへとならばどこまでも（そふて見かはす人のかほ（八尾源）（三オ）

百たびいふてもぬしある身では「とみ元」（くどふいふのがおまへのくせよなんぼそのよにせかしやんしても）（みさをたてたいこゝろざし）（芋かつ）はなのつぼみとこいじのふみは「長きよ」（一寸あさぎにふでそめていいいいのじをかゝんすかあはでこがれていさんすかそれでもいますたますさを）（ひらくあしたをまちかねる）（八尾松）（三ウ）

きやすめきいてもうれしく思ひ「とみ本」（どぶで女ばにやもたさんすまいわたしばかりがほれていてうそのへんじをま事とおもひ）（かげしやさだめしきらふたる）（芋かつ）

めうとやくそくおよびもないが「常はづ」（ありの思ひもてんとやらどぶで女房にやならぬけれど）（せめておそばでみやづかひ）（紙栄）（四オ）

もゝようたへたさてなさけなや「しんない」（たとへこの身はあは雪とともにきゆるはいとはぬがこのよのなごりにいまいちど）（あふてうよみがきかせたい）（八尾松）

このよでそれはぬあくゑんなれば「常はづ」（あのてらまちをでぬさきはわたしとりもしぬかく）（はすのうてなであらせたい）（栄次）（四ウ）

女ふたりがはなすをきくにいつもおとこのさたばかり

さたをするともおとこのやうにせけんかまはずいゝもせぬ

わがほれりやひとまかうかとじやすいのぐちでかた時はなれることはいやあふてのちおもひまはせばいよいよぐちよぶかくなるほど人よりも（五オ）

むすほれしえにしのいとほどふしぎはないよいまはからまるとこのうち

よのあけぬ国があるならふたりがすんでつもるはながして見たい

千のきせうでからすをころしぬしとあさねがして見たい

あさいとのよれつもつれつもつれつよれつすえはほどけぬえんとなり（五

ウ）
なみだもろひとわさびにまでもあまく見られる身のひころ

せうじびつしゆやり出ていたあとはとがなききせるをたゝきたてやばにしていきじをはるのあはゆきならでまぶにとけるではらがたつはりつめて見れはいくちで身はなつごふりとけてしまへばたゞの水」（六オ）

したえだのまゝなるはなはこゝろになくてとゞかぬこずえにくろつするこずえとてまゝにならぬでわしやなけれどもまこととゞかぬそのわけさゆきくれしひとにやどかすあるじのはなもあさのわかればそでのつゆ」（六ウ）

へのやうなねがひなんぞとわらわばわらへおさつでしよくせうがしてみたい
みぎとひだりにとうなすおさつおいていつせうくらしたい
さけもやめよがたばこもよさうやめてやまぬがいものみち
うめぼしのやうなおやぢもそのまへかたははなをさかせしすひのはて」（七オ）

（絵）さく丸撰」（七ウ）

七、『端唄のよせ本 月の巻』

菊池所蔵。表紙には、右から「さく丸撰」「さか盛画」「端唄のよせ本 月の巻」「初篇」「福忠板」とある。見返しには「はうたのよせ本 光齋」とある。「自序」には「酉の初秋 光盛舎主人 さく丸述」とある。酉は文久元年（1861）か。該本には乱丁・落丁があり、次の順番で綴じてある。十三・三・七・十二・十一・九・八・四・六・五・十四・序。少なくとも、

一・二丁は欠けている。丁付けの順にしたがつて翻刻すると、次のようになる。都々逸を含む。

端唄のよせ本 月の巻

さく丸撰 さか盛画 初篇 福忠板「(表紙)

自序

書物(もの)読者は。孔子の道を学び。仏法は釈迦を師と尊み。手習ふ童

(こども)は天神様。何れか其教の有ざらめや。既に今流行の歌沢ぶし。一

寸酒宴(おさけ)の其座敷(ところ)で。謡ふ唱歌のいと手みじから。人情

こもりし一流(ひとふし)の。其元つたに替唄を。添て顯わす一小冊。追々

跡を続穂(つきほ)の桜木。の世々出すを待かねて。御覽の程を。梓主に替

りて書のごとし/酉の初秋 光盛舎の主人 さく丸述「(序)

同かへうた

ぬれてこそつゆをもちとへ/いまはなにのちにかけて/こひしさのきみは

いまごろ/ふねのうちこまかたあたり/ほとゝぎすなくてわかれの/くちず

さみほれてありや/こそいのちまですてゝ/とのゝおためになるわいなサア

ぎりを/たてぬくけいせいはサツサたかをかきります「(三才)

同かへうた

つきひがいあふようれしとまで/がいにこがるゝむねのやるせ/なさはあはび

のかいのかた/思ひいつかとゞいてはまぐりの/あふてはなれぬやくそくも

/つもるはなしのあとやさき/こひのなかをしらない/からすがいサアにく

らしいじや/ないかいなサツサどうでもはなりやせぬ「(三才)

同

またいつとしのびあふよの/みじかさにつしかしらむ/とりのこへあけて

いわれぬ/むねのうちおやおやとのぎり/づめになくなくたてしけふの/

ひはおやはなみだのたね/あぶらいとしつぼみをなんと/なさけなやサアは

なのつゆと/するわいなサツサいけんもやすだいじ「(四才)

夕ぐれ本てうし

ゆうぐれにながめ/見あかぬすみだ/がはつきにふぜいは/まつちやまほか

けた/ふねがみゆるぞへアレ/とりがなくとりのなの/みやこにめいしよが

あるわいな「(四才)

同かへうた

あめのよにひとり/さびしきかどのとを/おとなふおとはぬし/さんがきた

かとゝんで/とあくればアレ/くら/しいくひなづらなに/ゆへわたしをだ

ますのじや「(五才)

同かへうた

ゆあがり/にむかふ/かゞみのふたとつて/うかぬおもひをゆうげしやうしみ

じみ/ほれゝばぜひがないアレ/ぬしゆへにこのやうにやせ/たがめには

かゝらぬか「(五才)

同かへうた

さくらどきいるか/あらそふむかふじま/すがたまばゆき/ふりそでのひと

しく/思ひますかゞみアレ/こひかぜにさそわれてわかれ/ともなきみやこ

どり「(六才)

大つゑ

たくれにうかうかと土てをまはりて/まつちやまたけや人とよぶこへを/さ

きのこゝろはすみだ川こひのせ/きやをしらひげでわしをあきはで/はづか

しく人のみるめをかねが/ふちおもひはしばのわたしぶね/いつまでもそば

にいほぎさま/くらばしみやうぎのはなしを/だまつてあやせばだい??

か「(六才)

同くるまづくし

たかなはでうしぐるまゑんさか/ほうはだいはちぐるまこども/しゆはかざ

ぐるまいなかの/はさまはいとぐるまたゞのぶは/げんじぐるまかたはぐる

まは/京のまちいざりのゝるのがち/ぐるまで三人けうだいはこゝよ/ぐる

まみづぐるまびんぼう人しんせうはひの車ノかけとりのかほをみてはいつでもいゝわけくちぐるま」(七才)

同げんじ

おまへとゑんをきりつぼともしもなるノかときはもみぢのがわなくなくらうもノはしひめはゆめのつきはしもわすらノれずはゞきをすてるともわたしヤノおまへにまきばしらはやくおなかにやどりノぎとにおふみやへとぐわんをかけノはなのゑんむすびめかたきあノげまきのこゝろのうきふねノさわらびやめてくださんせ」(七才)

??(二文字ほど破損)むらさきたゞ一トすじに人めのノせきやらちこへてたがひのこゝろをあかしノがたほんにこゝろもすまのうらまたノあふことをまつかぜとみをつくしノたるむつごともかはるこゝろのつれなノさにむねにほむらはかゝりびやノかけらうのなかぬほたるじやなノけれどもひとりくよくよはなちノるさとだときはみの里」(八才)

ドノ一

かけるふのつきもさやけきあのあやなみにふねでゆられてゆくわいな

すだのかはかぜにかいのすだれはりといきぢのみやこどり」(八才)

同

さきじやこよりにするふみなれどひとのめかほにたゝぬやう

同

たよりするにもかみかくこともならぬひとめのもじのせき」(九才)

ドノ一

うわきらしいがまあきかしやんせ「富本うす雪」(あいましときはすぎしはるじしゆのさくらもはなざかりほんに思へばきよみづのくわんおんさまのおなかつたがひに人めつゝましく)おもひいだすもうさはらし」(九才)

同

ひとのそしりもないしよのてまへ「常はつせきの戸」(まがきのうちよりこ

とまねきふはときせたるうちかけのすそへかくれてなかるつかとくじやの口をのがれしこゝち)ぬしにあふよのやるせなさ」(十才)

同

たとへしうとがおにでもじやでも「常はづげんだ」(たでくふむしもすぎずきとやらことしやかぼちやのあたりどしなぞとゆつたまきはづかしいつきだされぬうちこつちから)ほれたいきぢですわりこむ」(十才)

めぐる日本てうし

めぐる日にはるにちかいノとておいきのうめもノわかやぎてそろしほらしヤノかほりゆかしとまちわびつれてノさゝやぎたてるうぐひすのノきてはあさねをおこしけりノさりとははきみじかないまノおびしめてゆくわいなさつてもノけふをいひとさんじや」(十一才)

同かへうた

めぐる日にはるがきたとてノなにきがうかふるふのノねんがあきはせぬむごノらしやかほにいださぬノそのせつなさはおくノさんさうに思われて日がなノ一チ日やるせなしさりとはノきみじかないまさけかにゆくノわいなおそいとそれからあばれます」(十一才)

本てうしかきおくる

かきおくるふみもしどノなきかながはでだいてノねよとのおきこへてノいわにせかるゝちるなみのノゆきかみぞれかみぞれかノゆきかとけてなみじの二ツノもじつまをこひしとしたふてくらす」(十二才)

同かへうた

まちわびしねやもつれノなきしのびなきたよりノなきみのぜひもなやノあわでこのよにあるならばノゆきときへたきこゝろぞとノこひにくちなんはてまでもノ思ふがむりかへ」(十二才)

同かへうた

かきならすうたのノもんくのみにつれてノこゝろそゞろにさみノだれのすが

たはみへぬ／ほとゝぎすないて／くらすと思ひをつけよとりも／ものかはか
わゆらしはてしないのをさっさんせ」(十三才)

同かへうた

うかれくるはなのさかりを／よくよとおもひこがる／みながらもひとめ
を／しのぶはかなさはあらしに／ちらでかのとりのちらしは／せぬかとむな
さはぎさけで／しのがにやせひがない」(十三才)

同かへうた

あきくればもみぢいろ／づくよじやものをおもひ／おもひのひとこゝろ／あ
ふはわかれのもとひ／ぞとおもひあきらめさりと／てもまゝもこゝろのまゝ
／ならぬこひのくせじやと思わんせ」(十四才)

どゞー

ちわがつのりてくぜつのはてのまつたかひなきあげがらす

同

すねてかたよるふとんのはづれほれたはうからきげんとる」(十四才)

蓬左文庫に『端唄のよせ本 花の巻』を所蔵する。図書番号は尾 19-92。

表紙に「さく丸撰」「酒盛画」「花の巻」「端唄のよせ本」とあり、見返しに

「光斎」「はづたのよせ本」とある。端唄のみで都々逸はない。

八、『端つたとゝ逸もんく入大一座』

関西大学図書館所蔵。図書番号は、H911.93/S141。序題は「小唱(はう

た)大一坐」。序記に「丙辰の初夏 光盛舎の南窓に さく丸述」とある。

丙辰は安政三年(1856)。

十三丁めまではさく丸撰の『端つたとゝ逸もんく入大一座』だが、それ以降

は別本を取り合わせたものである。別本とは、万延元年(1860)刊の
『とゞいつ図会』の一部である。

以下、関西大学図書館蔵本の翻刻。

端つたとゝ逸もんく入大一座

了古画」(表紙)

(絵) 本家／さくらもち／大こくや」(見返し)

小唱(はうた) 大一坐の序

李白は酒で詩を造り雲上人(てんじやうびと)は月に寄(より)花にめでゝ
は歌を詠ず僕(われ)も真似して今流行(はやる)書肆(ふみや)の求に小
唱(はうた)を撰む唐(から)も倭(やまと)もおしなめて華の明日(あし
た)に月の昨夜(ゆうべ)雪の降日(ふるひ)は一ト塩に辛きも甘気きもう
ち連て火燵を入れし家根船でしつぽり唱(うた)ふ一ト節は実(げ)に(に格
替(かくけい)の閑楽なるべし

丙辰の初夏 光盛舎の南窓に さく丸述」(一才)

人めありやこそわたしのこゝろめかほでしらせるそのつらさ

はれてあわれぬふたりがこのみ(うばたま)にかいせかれてしのびあふ

つらいこいじもこゝろがら(江戸ばしてつ作)」(一才)

「タぐれかへうた」こつばいやむすめしのばすべつざしきかげもゆかしきせ
うじこしらふる琴のつきじるしアレこへがする人じらししみ人めがに
くいぞへ(桜川我幸)」(二才)

「あだなゑがほ本てうし」ゆきのよふけをたゞすごと小町のもとへせう
せうはうらみつわびつこりずまにかよいもなれし深草みちにやつれしなりも
妹(いも)ゆへにいとひはせじと九十九(つくも)みつこゝろのそこみわき
いづる水にぞさそふこひのみち(上広光盛連さし紋)」(二才)

「よどの車本てうし」おもいきれとはむねきないけんじつやあるふがはら
がたつそれはわたしのこゝろからじつじつやるせがないぞへ(上広光盛連さ

し吉)「(三才)

「きんとき」まんざいがまんざいがゑぼしすわふでつゞみをうつてとそのきげんでたかであうしさいそうなんぞもしほからこへでみるく十ねん辰のとししゆじんのたてたるおいへははんじやう」(三才)「いわいまふたるなりふりおかしかどは松竹しめかざり(上広光盛連さし菊)

ふつてくるとはいゝつじうらよどうぞぬれたいわがおもい(本二久作)「(四才)

どてらかゝへてしちやのうちへ

詞「コウばんとうさん一寸二朱かしてくんな

「なにこれはそうはつきません」マアむりでもどうぞかしてくんねへ「マアおまちなさい

「ばん頭はじつと品をみてアレまたあんなむりいふてこんなどてらは武朱はつかぬ

詞「どうあつてもか」そでより

わきがきれているひどいものをもつてきておまへの心はそうしたものか

(四才)

どこもやけあなこげている(江戸ばしてつ)

「さくらへ」

だつゝエだつゝエきりようわるしやれるはかんばんのどぶつかみやうげかあれぎやうさんなこへどうまこへあひるぶんこをしよつたよふ

たんとさせさせてへけなものをさせしやれにほいがすぎならはつたほうべたがあかいぶんだよ(江戸ばしてつ)「(五才)

「はる雨二上り」

中将のあつまのかたへゆく雲のつきよのはなにいやまさるこひのおもにおおきみやげかへりあふみのかたよりすがた影さすかゞみやまびわのうみべをたどりつゝやがてみかはやつはしかきつばたサアきつゝなれにし旅衣サツサイ

そいでまいりませう(上広光盛連さし安)「(五才)

あれきかしやんせわたしがむりか「山がへり」(よつやではじめておうたときすいたらしいとおもつたがいんぐわなゑんのいとくるま)あくまでおまへにじようたてる(上広光盛連な女)「(六才)

きりぎりすきつりきられてさてかこのなか「富本むしつり」(ちぐさ)すだくむさしのゝあぶみにあらぬくつはむしいなごすゞむしこがねむし馬をひむしのやるせなやわれはおよばぬみのむしなれどちゝよとなかでこひに身をやつれはてたるきりぎりす)はゝはくさばのかげでなく(光盛舎さく丸)「(六才)

くわせものとはしりつゝほれて「清元きせん」(せゝ)でまるめてうわきで「ねてこまちぎくらの詠(ながめ)にあかぬ)あきがきたらばてきれ金)がね(和泉ばし通り房丸)

ぬしあるおまへとしりつゝほれて「常はづ角兵へ」とてもいるにはならぬけれどせめてやさしいおことばを(きいてたのしむ胸のうち)光盛連房丸)「(七才)

「わかのうら本てうし」

はなのあさくさなところいへば「にごんげん二にわふもんさんに三社さま四にしくどくやだいいくわんおんしよにんにりやく四季のおくやまはなやしきおちややにうつくしたほぞろいサツサどうらせうにヤアかねしだい(上広光盛連よね丸)「(七才)

いまはたがいに入めをしのび「清元おちうど」(やばないなかのくらしでもはたもおりそろちんしごとつねのおなごといわれてもとりみだしたるしんじつが)やがてはれたるみやうとなか(江戸ばしてつ)「(八才)

あれみややしやんせあのかりかねもいとしかはいのみやうとつれ

つきもほのかにくもまをまれてはれてふたゝびぬしのかほ(光盛連な女)「(八才)

もしもこのまゝおわれぬならば「常わづ関の戸」(「やとよわれは」ひじろ
もはやぬきすてたらばたまのすみのころものたらちねの後のよねこふほたい
しんかうきのみちでさむるふぞや)「ほかのおとこのかほもみづ」(上広ぬし
平)(九才)

「大つゑぶし道成寺」

きのくにのどうしやうじかねのくよぶがごさりますきむすめかしらびやう
しなんでもおんなはいれられぬないしようでこつそりとおがませてくださ
せおれいにはまいをまふおもへばうらめしこのかねやとなりうこかねはおし
ようさんはのうまへといのればきれいなあねさんじやになつた」(九ウ)

「大つゑぶしふたつてうてう」

はなれごま蝶吉はこめやのむすこでけんくわずきぬれ髪とたてひきにあとへ
はひかれぬおとこづくふじやのあづまをばおたかいにたのまれてみうけのし
りをもちしらはのうへでのもんくいひきあねおせきしけんきいたか二人りと
もこれからなかよくきやうだいかためのさかづしき」(十才)

はつねなかせたおまへをすてゝ「常わづしづか」(みわたせばよものこすへ
もほころびてむめがへうとふうたひめのさとおなごははるははねつくてま
りうたひとごにふたごみはよをしのぶいつかむかしのさゝめごと)「なんでと
まるふもゝのゑだ」(光盛連中女)(十ウ)

「うぢをちやどころ本てうし」

さけはし?川さまさまのなかにうわさのかじまのうるこひとのきにあふくち
にあふいるもみもあるすいたさけさゝがこうじてきつねけんいちニイとりや
うばらい」(京ばし酒長)(十一才)

じぶんのこゝろがじぶんでしれぬ「あげがらす」(あふたしよ手からかわい
さが身にしみじみとほれぬいて)「もとめてくるつをするわいな」(さくらもち
大黒や内ひさ)

ふればふらんせおまゑのくせよわしがなみだのさつき雨」(十一ウ)

「つそとまこと本てうし」

ゆきつもどりつ五じやうざかさむさにつけてちやちやひとつそれがたがい
ゑんとなりたしかあみがさかげきよさんとときよみづでのわかれじははかな
いゑんと御さつし」(しほ善作)(十二才)

くるかくるかとまつみはほんに「ひとこゑ本てうし」(いつしかしらむみじ
かよにまだねもたらぬたまくらにおとここゝろはむごらしいおなご心はそぶ
しやないかたときあはねばくよくよとぐちなこゝろでないてあるわいな)さ
めりやひとこゑほとゝきす」(墨田人作)(十二ウ)

「タぐれ本てうし」

しののめにむこふ見わたすそでがうらおきにふぜいのかゝりぶねすさきのは
なが見ゆるぞへあれしほがひるしほひぶねやよひのくせのくもりがち(かみ
つね作)(十三才)

ひとのめかほをようようしのび「義太夫」(つりどつろつこのあかりをてらし
よむながぶみはみだいよりかたきのやぶすこまごまと)「あいた手くだをゑん
のした」(すみだれん年かげさく)(十三ウ)

鳩墙桃叟撰 五十点之部

どふて届かぬわたしがこゝろかぜの尾花のうたまねき」(三味センボリ ある
磨夫)

秋の夜寒を身にうちよせてあわぬきぬたのむら拍子」(竹木)

ぬしに逢ふたらどふ庵崎とはなの顔見りやすみだ川」(小ナキ川 田女)
しのぶ恋路もいつしか洩れてばつとうき名の立田姫」(玉屋内 美なめ)(十
四才)

露の情につゐほだされて月も宿かるくさまくら」(神田 はま女)

鏡ぶとんにまことをうつしぬしをちからにつきづとめ」(清元 寿磨太夫)
くやし泪と雨夜のほたるわすれかねては身をこがす」(蜚の家 おか女)

花にゆふべは寝たれどあけのかねにわかるゝ八重霞」(小アミ三 二兵)

切れる覚悟でかぶりはふれどいつかむすばる風の糸(小アミ みよし)〔十
四ウ〕

ふたりが彗にしはアノ輪飾りよ丸くむすんでとけはせぬ(小アミ 幾世吉)
雪が降てもぬしさへ来ればさほどつらみとおもやせぬ(すり本 児もと)

寒苦凌みではる花さみてすへは実をもつ谷の梅(芝カナ杉 秋江)

月に誠がうつらふならばぬしに見せたる胸のうち(バク口丁 従駒)

こたつやぐらで恋路の角力あしと人眼の関が邪魔(藤?り)〔十五才〕

紫陽花(あぢさゆ)のはなに能(よく)似たお前のこゝろ替り安さの色ぐる

ひ(六けんぼり 元蝶)

ぬしは秋風わしや気をもみぢ色にやもえたつ胸の内(イ、グラ 三友)

ふらばふらんせおまへの癖よわしが泪の皐月雨(遠藤)

はれて連れぬ二人りが中をむすぶの神かや朧月(柳園 喜彦)〔十五ウ〕

おなじ花でも秋さくはなはじみでまことを立とをす(清元 徳造)

すぬたお前とわしや早乙女の二畝もさんせも替りやせぬ(外カランダ 寿喜)

つらきうきめにわしやあふみがやぬしにつられて夜を明す(善ヶ野 万事
馬)

ふられた計りか雪にもふられうちじや親父が首をふる(青梅 家満)

来てはわたしに無理いふ紅葉鹿とさだめたこともなく(ヲトワ 里江)〔十
六才〕

余所へ引かるゝ事共しらでひとり子の日のぬしをまつ(赤サカ かつら子)

ふつと濃茶のくちきりそめてむねのふくさがさばかれぬ(三味センボリ 出
たら女)

ぬしに近江は美濃たのしみよ寝ものがたりは (かや)の中(うち)(シバ
巴馬)

人眼石洲芦屋の釜に首尾をまつ風茶立虫(松寿斎)

夏草の腐縁かよ姿を替て沢のほたるが身をこがす(さくら田 文字竹)〔十
六ウ〕

月と柳の影おく池にあそぶおし鳥りや鞠の沓(青梅、雨川)

賤が伏家にさす月よりもしのぶ恋路はもれやすい(下谷 権政女)

?華文略

番外之歌(五十五点より八十五点まで)

つらい悲しい年季のうちを辛抱する気にや花が咲(羽衣連 巴馬)

撫ツさすりつ大事にされてうちに寝るときや柏餅(紫連 梅春)〔十七才〕

結ばれた胸の思ひもさらりととけてぬしに扇の風のいと(シバ 巴藤)

底の冷たいこゝろとしらで迷ひましたよ雪の肌(下谷 芝扇)

炭にたとへりやお前はかたぎおこりやわたしもあつくなる(青扇齋)

わたしの眼当は奈須野々扇ぬしをはづしてなるものか(トキ八丁 彫長)〔
十七ウ〕

浮名辰巳と八幡がねも余所にとめたよ朝しぐれ(かつしか 楽桃)

引よせて (じつ)と見つめる柳の芽からばらりと落せしひと栗(青梅々
静女)

浮て花さへ水艸なれどそのあふ根はきればせぬ(小あみ 角伝)

遊びながらに此しん生姜のびるわたしの茗荷竹(青梅々 梅八)〔十八才〕

三光之部

九十点

気骨苦勞も逢ふ楽しみとおもへばさむさもいとやせぬ(東西国 岩吉)

今じやひかれぬ六日のあやめのぼりつめたる恋の意地(東ばし 綾女)

百点

木の実や木のもともまれておちてぬしの情にひるはれる(品川 袖丸)〔十
八ウ〕

柳亭光彦撰 二十五点より七十点まで

秋の来たの歎おまゑのそぶりうはの空なる月のいろ(三味センポリ 餅好)
梅にうぐひす竹にはすゞめわたしやおまゑをまつ計り(小ナギ川 出来内)

秋の夜寒を身に打よせてあわぬきぬたのむら拍子(三味線ポリ 竹木)

雪がとりもつ今宵の首尾はぬしとちん／＼鴨の鍋(水道橋 糸安)〔十九才〕

ぬしのこゝろは井筒のさくらうつり安イ二気がもめる(岩井 小志津)

それと悟ツて小耳をたてりやまたも水鶏が互、馬鹿な(水道橋 春笑)

水のながれとわたしが恋は海の月かえ果がない(小ナキ川 もみぢ)

逢れぬ事かとまた呑酒に來ない知らせかつもる雪(村雨)

逢へば別れとさて知りながらかえしともなや雪の朝(三谷ポリ よね女)

(十九ウ)

はなはもたねど山椒をおみなまことなりやこそ実を結ぶ(小ナキ川 まさ)

のぼりつめたをしゃくりののツてきれてくやしき風の糸(糸竹)

浮て花さく水艸なれど底のあふ根はきればせぬ(角伝)

逃した藪蚊のアレ憎らしい打にうたれぬあの寝顔(平の丁 三原)

切れる覚悟でかぶりはふれどいつかむすばる風のいと(みよし)〔二十才〕

娘ごゝろのたゞひとすじに星へ手向の恋のいと(本郷 三眉)

さとの桜も見倦てはやく見たいおまへの寮の菊(四ツ谷 夢足)

しのぶ約束誰が水さして氷る妻戸のうらめしい(芝神明丁 栄扇)

かゞみ蒲団に誠をうつしぬしをちからにうきつとめ(清元 寿磨太夫)

鶯の声もきかねば月日も知しぬ深山住居(ずまぬ)もぬしゆへに(よし原

嵐雅)〔二十ウ〕

おつなかげんでむすんだ中をかぜが邪魔するいと柳(モリ本 とん馬)

ぬしが来たかと雨戸を明ケりや月がわらふかゆれるみづ(小ナギ川 津寝)

月は晴てもおまへの心やみの礫であてはない(下谷 鶴福女)

心せかずにさめなひやうに松と竹とのすへながく(深川 かつ金)

かやにふく浪まくらの舟にのるもすゞしき床の海(ヲト八 里江)〔二十一才〕

茶にする心はさらさらなぬしがちやにする雪の水(?丸子)

番外十客之部 七十五点より八十五点迄

すねた梢を手くだとやらでおつにからんだ藤の花(小あみ 花見吉)

旅のなさに契りし恋は星のひと夜の根なし草(紫レン 梅春)〔二十一ウ〕

聞も咄すも人眼をかねて背中あわせのすゞみ台(青梅々 梅の戸)

頓て夫婦となるみの浴衣おもひそめたもむりはない(柳ばし 菊女)

しのび足して閨の戸あけてそつとたちぎく虫の声(横山三 小松兼)

主に近江は美濃たのしみよ寝もの語はかやのうち(司馬 ともへ)〔二十二才〕

露の情の色香にそみていつか逢瀬を菊の花(三味センポリ 餅々)

氷る硯にぬきふきかけてこぼす泪にしめる筆(二ツ目 あきら女)

五月雨の間に迷ふもいつか恋路のならいはれ間を松の月(水道ばし 朝寝)

こたつ檯で恋路の角力アレサ人目の関が邪魔(シバ 夢暮里)〔二十二ウ〕

三光之部

九十点

色気づゐたよあのほうづきも人目なければちぎられる(御舟蔵前 ゆたか)

九十五点

ぬれて色ますわか葉のもみぢすえにやうき名のたつた川(小アミ 梅中)

百点

露の葉ことに照りそふ月はどこへ誠をうつすやら(二ツ目 つばめ)〔二十

三才〕

紫連補助之部

硝子(びいどろ)

の中におよぎし金魚でさえもぬしにつられて気がもめる

(菊の屋 秋月)

山吹の色に迷ふてうき名はたてど当座の花には実がならぬ(香琳舎 春?)
青いすだれのうちからのぞく花がめにつくさくら艸(さう)(春道 楽成)
風の便りに任せて逢ふてうれし泪の落葉川(江左庵 花船)(二十三ウ)
泥にや咲ても江戸紫はいろに根づよひかきつばた(山泉舎 彫長)
ぬしに逢ふのはよい緋ざくらよつもるはなしも山ざくら(後見 蓬齋 東琳)

玉章のあつまりたるを見て

余所の恋路と浮気な花をよせてながめて気をはらす(催主 梅の家 梅春)(二十四才)

軸

はなし声さえかすかになりて更行闇にきりきりす(東都 柳亭 光彦)

ニタツ来たよりひとつがゆかし花にゆるるゝ蝶の夢(鳩垣 桃叟)

はたからおまへの噂をきけば逢ふたはじめをおもひ出す(梅素亭 玄魚)

東琳書画(二十四ウ)

関西大学図書館蔵書については、著作権の切れたものであれば、翻刻許可を求めることなく、自由に翻刻してよいとのことである。光盛舎さく丸の生没年は不明だが、本書は安政三年(1856)の出版であり、今から一五四年前のものであって、著作権は消滅していると考えるのが常識的判断である。

九、『都々逸大一座』

関西大学図書館蔵。図書番号は、911.65/K730。刊年不明。見返しに「ど〜いつ大いちざ 光斎」とある。さく丸の撰という確証はないが、中に

さく丸作の都々逸が二首ある。

ど〜

きりぎりすきりきられてさてかこのなか「富本むしうり」(ちぐさにすだくむさし野のあぶみにあらぬくつはむしいなごすゝむしこがねむしうまおひむしのやるせなやわれはおよばぬみのむしなれどちよとなかでこひにみをやつれはてたるきりぎりす)おやはくさばのかけでなく(光盛舎さく丸)ど〜

かんどふのみとはとうとうなりひらさんでこまちたもんだあくたかは(下谷 さく丸)

十、『新撰大津絵ぶし』甲本

関西大学図書館蔵。図書番号は、H911.92/K21。表紙に「さく丸作ノ芳盛画」とある。見返しには「光斎」とある。泉通舎房丸の「代序」に「辛酉のはつ春」とある。辛酉は文久元年(1861)。本文末尾に「光盛舎さく丸作 一好齋酒盛画」とある。吉田屋文三郎板。大津絵節のみで、都々逸はない。

十一、『新撰大津絵ぶし』乙本

関西大学図書館蔵。図書番号は、911.65/K840。表紙に「さく丸作ノ芳盛画」とある。見返しには「光斎」とある。刊年不明。大津絵節のみで、

都々逸はない。

十二、『女大學絵抄』

光盛舎作丸著・一光齋芳盛図

東京学芸大学所蔵。

「東京学芸大学リポジトリ」で画像が公開されている。

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/images/EP20001807/kmview.html>

「甲子の孟夏 光盛舎記」とする「女大学序」がある。甲子は元治元年（1864）。内題下には「光盛舎作丸著／一光齋芳盛図」とある。吉田屋文三郎板。

十三、『一トつふ撰はつたの玉緒』

菊池所蔵本は本文十丁。東京大学総合図書館に二編二冊本がある。前半（初編？）が菊池蔵本と同じものようだが、六丁のみで七丁以下を欠く。東京大学蔵本後半（二編）は本文九丁。

菊池蔵本表紙には「一トつふ撰はつたの玉緒」「一ツよりしいのみ」「ハウタ」とある。東京大学蔵本前半（初編）も同じ。序には「序にかえて／折句／はなさくや／うちぞゆかしき／たかわらい／光盛舎さく丸」とある。本文は端唄のみで、都々逸はない。

東京大学蔵本後半（二編）は、表紙は「一ト粒撰葉唄の玉緒」となっている。一丁から八丁までは端唄だが、九丁のみが都々逸である。

みづあけのしよてはわけなくあのはな生もいまはたのしむ床の上（西の久保はる）

つきもほのかにくもまをまれてはれてふたゝびぬしのかほ（麻布岩）（九オ）

おゝいひとめをしのんだふたりあだな風じやちりはせぬ（無名）

あやめもわかぬよもいとわずにあふたわたしのみくらさ（下谷道具熊）（九ウ）

著作権について

光盛舎さく丸の生没年は不明だが、万延元年（1860）ころを中心に活躍していた人。今から一五〇年ほど前のことである。百歳まで生きたとしても著作権は消滅している。さく丸については著作権は切れていると考えるのが常識的判断である。

